



目次

| | | | |
|------------------------|-------|--------|----|
| 「深い浸食の国」キングドム・ウオードの世界へ | | 中村保 | 2 |
| 山の四季——母の観山句 | | 加地幸雄 | 4 |
| 秋の山の歌 | | 有賀盈 | 8 |
| 山本健一郎さん追悼山行 | | 蛭川隆夫 | 10 |
| あの頃、これから。 | | 高崎俊平 | 12 |
| 「エーデルワイスの歌」外聞 | | 金子晴彦 | 16 |
| NHKスペシャル | | | |
| 「白夜の大岩壁に挑む」制作余話 | | 白石章治 | 17 |
| アジア往復旅行1年2ヵ月① | | | |
| ザ・トラブル | | 田形祐樹 | 20 |
| 九州の山 | | 淵沢貴子 | 23 |
| 中村保さんが | | | |
| 王立地理学界協会からメダル受賞 | | | |
| 新入部員紹介 | | | |
| 山行報告・山行計画 | | | |
| 三月会通信 | | | |
| 別刷付録「小谷部全助 文献抄」 | | 砂田定夫 | 25 |
| 表紙写真Ⅱサルウィン川支流の玉曲を行く | | 撮影・中村保 | |

発行日 2008年6月30日
 発行者 針葉樹会
 印刷所 ヤマノ印刷株式会社

針葉樹会報
 第 112 号

編集人 小島 和人
 〒241-0817
 横浜市旭区今宿町 2-60-1
 会報幹事/小島和人、井草長雄
 川名真理

「深い浸食の国」

キングドン・ウオードの世界へ
行けば必ず新しい発見がある

中村 保（昭33年卒）

世界で最後に残された未踏峰の宝庫「ヒマ
ラヤの東 チベットのアルプス」は東チベッ
トから雲南、四川にかけて広がる。そのなか
で横断山脈の核心部である「深い浸食の谷」
はアジアの五つの大河がわずか150kmの間
を互いに接して南流する。ゴルジュは深く山
嶺は高い。中国では「三江併流」（金沙江＝揚
子江、瀾滄江＝メコン川、怒江＝サルウィン
川）と呼ばれ、その驚異の景観ゆえに200
2年にユネスコの世界自然遺産に登録され
た。
「塩井から北西に旅すれば、どちらを向いて
も高く聳える氷雪の峰々と対峙するだろう。
そこはイラワジ川源流の彼方まで、果てしな
く重畳と広がる未知の領域であり、植物学者
にとって無垢の楽園である」（キングドン・
ウオード、1922年の旅）。プラント・ハン

ターのパラダイスは知られざる高峰、独特の
風土の吸引力のある世界でもある。

2007年11月、横断山脈研究会の五人の
仲間と初冬の1カ月間、雲南省から東南チ
ベットへ出かけた。豪壮なサルウィン峡谷を
北上し、東チベットで最も美しい森林とゴル
ジュの谷、チベットの神秘の川・玉曲ユイチュウに入っ
た。そこは魅力尽きないキングドン・ウオード
の憧憬の地、チベットでは温暖で豊か、美形
の多いツァワロン地方である。16頭の馬の
キャラバンを編成し11日間の踏査の旅を
行った。百年ぶりというほどの大雪で計画変
更を余儀なくされ、泊まったチベット族の家
の煙に悩まされ、全員風邪に苦しんだが、一
応の成果は持ち帰ることができ、三つの山群
（すべて未踏峰）の写真を初めて世界に発信す
ることができた。

広大な「ヒマラヤの東 チベットのアルプ
ス」は四つの山域に区分される。

- 1 念ニエン青唐チンタン古拉山クラー東部
- 2 東西450km 未踏の6000m峰2
00座
カシリガルボ
崗日嘎布山群
- 3 東西280km 未踏の6000m峰30
座
横断山脈 深い浸食の国

南北250km 未踏の6000m峰20
座

4 横断山脈 四川西部高地
揚子江の東 未踏の6000m峰5座
ピークの多さ、氷雪の峻険・秀麗さ、氷河
の発達に念青唐古拉山東部と崗日嘎布山群に
は及ばないが、アジアの五つの大河が接近し
て南流する「深い浸食の国」の深いゴルジュ
と高峰が織りなす景観と風土は探検家にとつ
て憧憬の土地である。山系を概説しよう。



ダムヨン 6324m 南面。怒山山系ダムヨン山塊の未踏の最高峰

伯舒拉嶺

北部はブラマブトラ支流（ロヒト）／ツァンポー支流（パルン・ツァンポー）とサルウインの分水嶺、南部はイラワジとサルウインの分水嶺を形成し、雲南省に入ると高黎貢山と名前が変わる長大な山系である。北端に一、二の6000m峰があるが、サルウイン（怒江）の右岸にある顕著な三つの山塊 楊巴必松（6005m） 查格腊子（6146m） 木孔雪山（6005m） が特に注意を引く。秘峰と呼ぶにふさわしい。

高黎貢山の最高峰は雲南省の内中洛の東に聳える岩の険しいピーク、カワカブ5128mである。なかでも木孔雪山はネパール・ヒマラヤのガウリサンカールを小さくしたような険しい山容で、氷河も発達した大きな山塊である。楊巴必松の写真はまだ一枚もない。

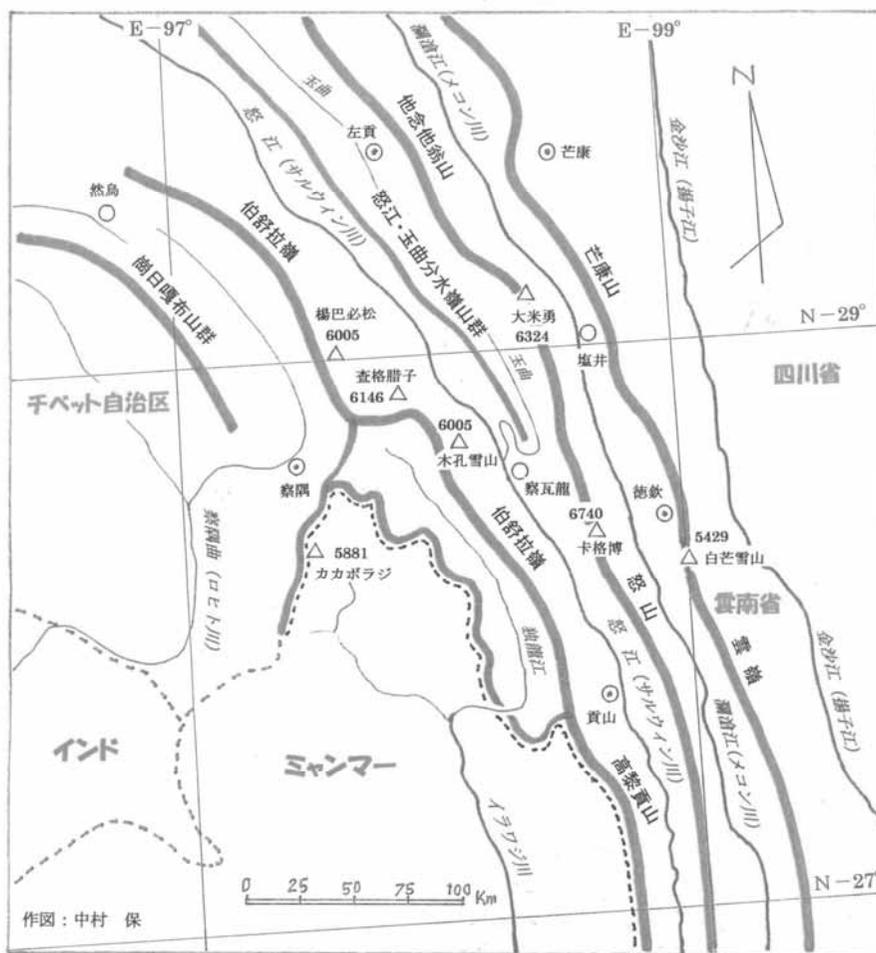
サルウイン・玉曲分水嶺の山群

ゲウン山群の他、サルウインとその支流の玉曲の分水嶺をなし、5400～5800mのピークが連なる。南から順に ゲウン山塊（5700～5800m） 北部は岩峰が多い 中央山塊（5300～5700m） 峻峰が多い 北部山塊（仮称、5400～5800m） 顕著なピークはない。

他念他翁山／怒山

サルウイン・メコンの分水嶺をなす長大な

深い侵食の国 - 山系図



山系である。南部が壮麗な梅里雪山（6740m）を擁する怒山、北部が女神の山ダムヨン（大米勇6324m）とドウンリ・ガルボン（6090m）の岬々たる山塊がある他念他翁山。梅里雪山は氷河が発達しているが、北部の山塊は降雪量が少ないせいか、岩山の連山で氷河は発達していない。怒山山系の梅里雪山は観光の目玉になっているが、ダムヨンに注意を払う人はない。しかし、土地の手ベツト族は信仰の山として崇拜してきた。塩井から北に連なり、ダムヨンとドウンリ・ガルボンの二つの山塊を繋げると南北50km、5座の6000m峰がある。ダムヨンに近づいたのは1922年にキングドン・ウオードが東面から、その後は西面から2001年の吉田外司夫氏『ヒマラヤ植物大図鑑』の著者）が接近しただけである。そして2007年に横断山脈研究会の隊が初めて西面の写真を撮った。

なぜ「ヒマラヤの東」に通うのかと聞かれたら、「仕事でも山でも新しいプロジェクトを考え、つくり上げてゆくの主義。大方のひとは有名なところでなければ行かない。僕は逆に知られていないから行きたい。新しい発見がパイオニアの心を打ち、次の旅へと駆り立てる」と答える。お陰で、内外で認知され評価されるようになったのは嬉しい。

ミック・ファウラーは早くもダムヨンに目をつけ問い合わせてきた。伝統あるアルパインクラブ（英国）は今回の踏査行をEメール・ニュースで発信し、木孔雪山とダムヨン主峰と隣接する岩峰の三つの未踏峰の写真を紹介、これらのピークへの挑戦は同クラブの遠征助成の対象になるだろうと報じている。さすがはアルパインクラブである。

老年探検家冥利に尽きる。

山の四季 母の観山句

加地 幸雄（昭33年卒）

私の母・加地ときの句集を編纂していたら、山の句が少なからず出て来た。登山の句ではなく、観山の句だ。いずれも既に新聞や俳句雑誌に発表済みのものだが、その中から凡そ四十句を選び、私の注や感想を付け加え、この場を借りて披露させて頂きたい。諸兄妹の山の楽しみに資することあれば幸いである。

春の山

土に着く前にたゆたひ春の雪

春のぬくもりで、雪片が大きくなり、草の絮のように揺蕩うて降りて来る。地上近くでは着地をためらっているようにも見える。山でも町でも見られる現象だが、この句は三月末の上高地を思わせる。涸沢以高はまだ冬山だが、上高地まで下りて来ると、梓川のほとりの雪棚の下面に小さな氷塊が連なり、その表面に、目には見えぬ水が流れているのである。水滴がたれ、梓川の水も増して来た。日のぬくもりでは、もうアノラックも手袋もいらぬ。すると突如雲が目を蔽い雪片が舞い始めた。土に着く前にたゆたひ雪片が。

廃車うず高くして山笑ひ得ず

近景は廃車の山、背景は草木の萌え立つ春の山。そのような春の山を擬人化して「山笑ふ」というが、この近景では、山も笑い得ないであろう。「山笑ふ」の二義を用いて、自然の美しさと、それを損なう人為の跡を対照させている。

山笑へば森も裾野も笑ふかな

草木の芽吹きは裾野から始まり、徐々に山巒を上って行く。頂上近く芽吹き始めた頃は、既に森や裾野は萌え立っている。生の歓喜の協奏とも云える。

花前線ゆつくりゆつたり峠越す*

温暖前線が通過する毎に、芽吹きが勢いつき、桜の開花が近づく。前線は緩やかで、ゆつくり峠越し、日和が続く。

山風は山へ帰りぬ鯉鱈

麓の里の鯉鱈。山風を孕んで翻っていたが、今見ると萎んで垂れている。山風が山へ帰っていったのだ。

夏の山

荒梅雨の首霊山の声となる

梅の実が熟する頃なので、「はい」ともいおうが、梅も熟れて梅雨明けが近づくと七月上旬は、降り方が激しく、雷鳴を伴うことが多い。それを霊山で、杉の太木を仰ぎ、濡れ乍ら聞けば、まさしく「霊山の声」と聞えよう。梅雨が明けると、山開きだ。

山霊も麓より登る山開き

夏霧のかんぬき外す山開き

崇拜の対象であった霊峰は、一定の期間を除き、登ることを禁じていた。その禁を解くのが山開き。夏霧はかんぬき外したと見え、晴れ上がって行く。お詣りの山登りは、山霊がお伴だ。

沖に又沖ありて 聳つ雲の峰

「雲海」という表現があるから、「沖に又沖ありて」はその延長だが、雲の波は連峰をも思わせる。そこで、眼下に果てし無く広がる雲、その水面を貫いて高昇する入道雲を、海と峯の二重イメージで捉えた。

どこまでも主張を曲げず雲の峰

もくもくと上昇する入道雲の勢を、擬人化して、「どこまでも主張を曲げず」は一興。但し、私のような強情な張りが先ず念頭にあり、その一徹振りを「雲の峰」に譬えたのかも知れない。

一暴れせんと雷神山に来る

入道雲と雷はつきもの。激しい風雨を伴う雷に襲われる寸前、山の気流は非常に不安定だ。後押ししていた風が、急に横なぐりに吹いたりする。我々は山頂や稜線から退去した方がいい。この状態を擬人化し、主観的に見れば、正に「一暴れせむ」だ。

青柿の落ちて小さき山の音

野生の柿の木は、見たことがないから、これは山里の柿の木か。ともかく、未熟の柿の実がポツと落ち、静寂を破った。その「小さき山の音」が静寂を実感させる。

滝音の断万緑ゆるがする

緑濃い山道を辿って行くと、ある音に気付く。何だろ。風渡り梢のざわめきか。少し先へ行くと分かった。こうこうと滝の音が万緑の谷間に響き亘っているのだ。

氷河の碧決断に色あらば

俳句は現識、実感を神髄とするから、仮定の句は難しい。しかし、この句は、「氷河の碧」を身を以って知る者に、決断直後の実感を惹起させる。もう実行のみ。右顧左眊は無い。

決断は氷河の碧の厳しさだ。

腹巻きに銭地下足袋の富士登山

私は中学一年の夏富士山に登った。毛糸の腹巻き、植木屋さんなどの履く地下足袋、それに山では、六根清浄の杖と草鞋穿きの正装だった。前夜八合目の小屋で頭痛に悩まされ乍ら休み、翌朝辛うじて頂上に立ち日の出を拝んだ。一九四八年七月二三日。その日付けを覚えていたわけではない。頂上の山小屋で母方の祖父の死報を、ラジオで耳にしたのを忘れず、最近その命日と照し合せて分かった事だ。この母の俳句は二十七年後の一九七五年。それから既に三三年たった。まことに「光陰如矢」だ。

街中に行く土臭き登山の荷

これも私の登山姿を詠んだもの。一橋では、一年生の時には蹴球部に属し、一年生の始め、一九五五年四月に山岳部に移った。大きな登山の荷は、新宿や上野の人込みの中で、特に目立ったものだ。「土臭き」は街中では芳香か、汚臭か。木の香も体臭も交えた独特の臭いだろう。家の犬は飼主である私の臭いと感受していたであろう。

山風の寛ぎに来る釣葱つひし

シノブグサをわがねて、軒端につるし、涼味を添えるため、水をかける。そこに山風が寛ぎに来る。山風も、里人も涼味を楽しむ麓の里の一景。

山より曳く水音軽し夏座敷

日経俳壇（一九九七・七・六）の選者江国滋氏の評「最高にぜいたくな生活空間。この句が伝えている豊かさの前に、クーラーなどは貧しい利器」。

秋の山

全山の刻こくを止めて濃き紅葉

一山の神に仏に草紅葉

木の精の息詰るほど照紅葉

散りしける落花この世の聖地かな

「刻を止めて」は時の流れを止めての意。「濃き紅葉」の讃嘆に時の流れを忘れ、過去も将来も脱落し、残るは現識三昧のみ。これは

まさに神や仏の境地、「この世の聖地」でもある。「草紅葉」は晩秋の冷気に紅葉した草の葉。「落花」は紅葉した落葉を指したものが。

蛇笏忌の山巒彫を深うする

俳人飯田蛇笏（一八八五—一九六二）の忌日は十月三日。秋も深まる頃、日輪も空高く昇らず、屋根の陰影谷に長曳き「山巒彫やまのたけぼりを深うする」。但し、「巒」は衣、「彫」は木を思わせるから、「山巒彫」というイマージュは統一を欠く。

耳聴くなる木の実の降るる山に入り

聡い耳は、「木の実の降るる」を感受して、山の静寂に浸る。

標高千五百の尾根に秋の声

遠山とみやまを風渡る音神の旅

「秋の声」は秋風の嘯うそがきか。「神の旅」は、地元の岡垣君にきくと分るが、諸国の神々が十月出雲に旅し、集うを指す。地方は留守になるので、十月を神無月と云う。「標高五千尺」も「遠山」も雪が近い。

山仰ぐことが息抜き牛蒯引き

春播は十月に採取する。牛蒯は根深く、切れると困るので、牛蒯引きは大変。時々腰を伸して山を観ると、疲れが取れて、もう一畝という次第。

山国に荒粒の星流れけり

一鱗は遠嶺に跳ねて鱗雲

冬の山

山門に北山しぐれやり過す

「しぐれ」は急にばらばらと降ったかと思うと、さつとやみ行く雨。山地に多い。この句は、傘無く、山門に、しぐれが過ぎ去って行くまで、雨避けした体験の直詠。

雪来ると山々座り直しけり

日経俳壇（一九九一・一一・三〇）選者石原八束評「秋氣にいつしか山相をあらためてきた高い山々が、いざ雪が来るといふ時には、きびしい姿勢に座り直していた、という句意。風雪に耐えんとする心の位相が潔い。」

風音なく山は眠りに入るらし

煩惱を我に捨てよと山眠る

貴き山高き山より眠り入る

「山眠る」とは、冬山の黙々と眠るが如き様をいう。雪の蒲団を覆って。「貴き山高き山」より先ず冠雪し、低い山も順々に眠りに入る。私の住むユタ州の塩湖城は、山に囲まれており、晩秋から初冬にかけて雪線が徐々に谷へ降りて来る様を楽しめる。私にとっては、眠る山は、煩惱を捨てよという訓より、むしろ冬山への誘いだ。

無駄なものの無くて重たき登山の荷

「登山」は夏の季語で、私の母も、私の山旅に出で発つ姿を見て、夏の句として詠んだものであろう。しかし私には冬の句のように思われる。というのは、冬山の荷は特に重いが、省くものはなし、何か装備に欠けたものがあると、命にかかわる。しかし、何と云っても、昔は重い荷を背負ったものだ。体重の半分の荷は、冬山では軽い方だと思っていた位だ。近頃は、一週間の夏山の縦走の荷は、私の体重の四半に近い。（因みに、私の体重は卒業以

来五十年はほ十六貫で一定している）

初明り金の鞍置く駒ヶ丘

元旦の旭日が山頂に金箭を射る。その山が「駒ヶ丘」なので、「金の鞍置く」と連想した。山の名に留意する句だが、麗らかに清々しい光景を撮られていると思われる。

羊腸の山道も又恵方道

恵方は年神の来る方角。その方角にある社寺を正月に詣でると、恵みが授かるといわれる。私には、元旦に雪深い羊腸の山道を一スキーで辿るのは、恵方の初詣だ。

リフトに乗る吾を雪嶺が強く曳く

私はリフトを自然破壊と見て好まない。山は脚腰で登るもの。文明の利器に体ごと運んでもらうと体も心も腐ってうざと気張り勝ちだ。雪嶺を観て強く曳かれぬ者は、岳人にはありえない、とも思う。雪嶺と云うと、道元が建立した福井の永平寺で

雪嶺の白銀騎り藍に染む

の名句を詠んだことを思い出した。

山にすがり山を皆の冬構

冬に入ると風雪や寒さに備えるため、北窓をふさいだり、風除けを設けたりする。それらを総称し「冬構」と云う。従つてこの句は、厳冬多雪地帯の山里の一景。しかし私には、完全装備で冬山に入る岳人の姿にも見える。

俳句に読み耽ると得手不得手を問わず、詠みたくなるのは、私だけではないだろう。蛇足になるが、今も続けている冬の自転車通学を詠んだ二句を付け加えさせて頂く。

息白く霰弾くや前輪まへぐるま

寒風を切る頬泪塩の味

今年の塩湖城は二十年來の厳冬。日本は如何。諸兄妹の御健勝を祈りつつ筆を擱く。

* 原句には「ゆつたり」が無い。私の挿入。

私の山の歌

有賀 盈（昭36年卒）

何時だったかインターネットのH U H A C上で山の歌に関するやりとりが行われたことがある。会報編集者の一人としてうまく纏められないものか考えたが良いアイデアが浮ばずそのまま終ってしまった。編集幹事の任を降りた途端に会報に何か書けと言われたのを機会に、私なりの山の歌とそれにまつわることを書いてみる気になった。

2年生のとき山岳部に入部して初めての夏山合宿（涸沢）は連日連夜豪雨が降り続け、狭いテントに閉じ込められてじっと時が経つのを待つという、今にして思えばそれは悲惨ともいえるような毎日だった。そういう状態をどうやって過ごしたのか具体的にはつきりと思いつけることは少ないのだけれど、山の歌をはじめとして民謡や流行歌といった色々な歌が盛んに歌われていたような気がする。有楽町で会いましょうは誰かの十八番だった。

たし、2年上の市川さんは英語の歌がとても旨く「Stokyの山の上で……」という歌はまだ耳に残っている。何故か裕次郎の錆びたナイフという海辺の情景を述べた歌が正面に間近に迫る常念岳とともに思い出される。

そういう数々の歌の中で未だに折に触れて聴いている歌がある。中川が歌っていたもので題名は知らないが、歌詞は「夕日山に沈みて 黄昏迫る頃 われ一人 山に立ち 遠き君を思う……」と恋人を失った哀しみを切々と歌う大変きれいなメロディーだ。社会に出て数年後、最初の海外の任地メルボルンのこと。出勤途上の車のラジオから突然このメロディーが流れてきて、なんととも言えぬ懐かしい気分が胸が一杯になった。

何とか聞きとった歌手の名前（ルシル・スター）と曲名「フレンチ・ソング」を手がかりに、その昼休み早速近くのレコード店で探したら、ありましたね。まるで異国で旧友にばったり出くわしたような気持ちだった。このレコードはそれ以来常に私のそばにあつて、いまや相当擦り切れてはいるけれど相変わらず私を楽しませてくれている。

歌手の「Julie Star」はフレンチ・カナディアンだがアメリカ西海岸でカントリー、ヨードル、ポップなどを歌い、この曲が1964年にミリオン・セラーになったそうだ。それ

が地球を半周してダウンアンダーに着いた頃にタイミングよく出会ったのだらう。原曲はアメリカのカントリー・ミュージックではなからうか。仏語、英語両方で歌っていて、仏語で聞く方が一層雰囲気ができるのだが、仏語の自信が無いので英語の出だしの部分だけを記しておく・

When the sun says good day
to the mountains
and the night says hello to the down,
I'm alone with my dreams
on the hilltop,
I can still hear his voice
though he's gone.
I hear from the down a love song
through the wind,
it brings back sweet memories of you.

「山の大尉」という歌は山だけではなく当時は歌声喫茶でもよく歌われて知られていたが、曲名をイタリア語で = *testamento di capitano* だというのは遠藤から教わった。彼はイタリア語の歌が得意で、コンパなどの酒の席では必ず2、3曲出てきたもので、アヴァンティポロ アラリスコッサ ヴァンディラロッサ ラトゥリオンフェラ という威勢

のいい革命歌も意味は分からないながらもいつの間にか覚えてしまった。そういう訳で例のメルボルのレコード店で何気なく取り上げた一枚に、この山の大尉の題名が含まれていることをすぐ認識できたのもそのお陰である。25名ほどの男声コーラスによるイタリア山岳兵の歌の特集らしい。

山岳兵の歌は一次 二次の両大戦を含んだ時期に盛んに作られたようで、この盤には全部で12曲収まっている。素材だが力強い男声合唱で朗々と歌われる = *testamento di capitano* は中でも私の最もお気に入りの歌となり、このレコードとも随分と長いお付き合いになってきている。実は私の兄弟が元気な頃は、3、4人集まって酒が入ると必ず自然に独り善がりの合唱が始まったものだけれど、山の大尉は数少ない持ち歌の一つであった。

このレコードにはもう一曲大好きな歌がある。曲名は「*Staluis Alpini*」とあり、内容は死んだ山岳兵が恋人に「私はあの高みのエーデルヴァイスの花が咲き乱れる岩陰にいます。どうかそこで花を一輪手にして私の為に祈りして下さい。そうすれば私は貴女と共に居れるのだから」とお願いする内容で、哀調を帯びた荘厳な響きの美しい歌だ。これを聴くといつも山讃賦を思い出し、二つの曲がよく似ていることに驚く。これは私ひとりの

思い入れだろう。人がこの歌をどう感ずるか聞いてみたい気がする。

先日ラジオの深夜放送を聴いていたら、五木寛之が初めての欧州旅行の途中ナホトカ行きの船上で起こった出来事を話していた。一夕、船客同士の宴会が始まり、それぞれ出身毎に自国の歌を歌っていたところ、日本の登山隊のグループが「雪よ岩よわれらが宿り、俺たちや町には住めないからに」と歌いだした。これを聞いたアメリカ人グループが怪訝な顔をして、これは日本の歌だったのかと言ったという。確かにタークタクスなどが歌うのを聴いていると、埴生の宿や蛍の光などの輸入された曲と同程度に日本の歌になっているといってもよいくらいだ。しかし私には英語の歌のほうが印象が強い。

この曲の名前 *My darling Clementine* そのものを題名に採用した西部劇をご存知だろうか。ジョン・フォード監督、ヘンリー・フォード主演の「荒野の決闘」で、映画の出だしと最後の場面でこの曲が実に効果的に歌われていて、映画も歌も両方とも見事な出来栄だ。余談になるが、2007年の針葉樹会の新年会で山本健一郎さんと話していたら、OK牧場の決闘を主題にした西部劇は何篇かあるが、シェイクスピアの劇を演じる場面があっ

た映画はどれであったか、どうしても思い出せないが知っているかといつこ下問があった。私はシェイクスピアの場面など全く覚えてはいなかったが、そういわれてみると荒野の決闘でウィクター・マチュア扮するドク・ホリデーが教養の高い人物に描かれているの思い出し、そんな場面があったら「荒野の決闘」しか考えられないでしょう、とお答えしたものだ。

山本さんとはこれが最後の会話となつてしまつたが、その後ずつと気になつていた。最近この映画のDVDが手に入り、早速見てみたら、なんとハムレットのあの to be or not to be で始まる有名な台詞が、そっくりそのまま西部の安酒場のテーブルの上で演じられているではないか。そこで私の推測が正しかつたことに何故かほつとしたのだが、同時に初めて気がついた。茶目っ気のあるあの山本さんのことだから、「ご本人はどうに知っていないがらあの質問をしたのだろう、今頃天国でやりとしておられるに違いないと。

日本の民謡も色々と山で歌われているが、その中で一つ忘れられない歌がある。中村保さんの「ヒマラヤの東」の出版記念パーティーでのことだから1996年頃だつたと思う。大先輩の吉澤一郎さんが車椅子のまま「安曇

節」を歌われた。高齢を全く感じさせないさびの利いた力強いバリトンで、長年歌いこんで鍛えられた声が、しんと静まり返つた会場に響き渡るのをきいて深い感銘を覚えた。ああいう歌は滅多にきけないし歌えない。大切な思い出だ。

山本健一郎さん追悼山行

蛭川 隆夫（昭39年卒）

一周忌も過ぎた二〇〇八年三月二十六日（水）二七日（木）、山本健一郎さんの追悼山行が奥多摩で行われた。宿は、数馬にある蛇の湯温泉「たから荘」。ここは、二〇〇四年二月に石井・山崎両長老の七〇歳代最後の記念山行で山本さんが泊まつた、思い出の宿（他に、佐雑・高橋・蛭川）。そのとき、前夜の天気予報でN予報士が「明日は雨」とのご託宣を下したが、翌日は予報がはずれて小春日和。山本さんは、このことを、はずれたのはTV画面のNさんをみんなで褒めたからだ、「皆さん、気象予報士を褒めれば天気は良くなるの

です」と書いた（『針葉樹会報』一〇三号）。

二六日は、各人思い思いのプランで宿へ集合した。石井・山崎・佐雑・高崎さんは、生藤山から熊倉山、浅間峠を経て檜原街道の上川乗バス停へ下りた。山崎さんは、これで、三頭山を起点とする長大な笹尾根のうち、歩き残した部分がトレースできた。山崎さんは処方薬の副作用で胃腸の調子が悪くてそのまま帰宅したが、山本さんのおかげで念願の笹尾根完全踏破を果たしたことになる。三井・遠藤さんは、鞆口峠から三頭山を回つて宿に一番に入った。三井さんは、意外にもミトウザンにはミトウだつたが、これまた山本さんとの御縁で積年の宿題を片付けたことになる。遠藤さんは、この日のために新調したアイゼンの出番がなくて残念だつたようだ。本間さんは、戸倉三山の一つ臼杵山を目指すも道に迷い、842mのピークを踏まずに、予定より遅れて宿に着いた。「丹沢の本間」も「奥多摩の本間」になるにはまだまだ修行が要るよ……そういう天国の山本さんの声が聞こえてくる。蛭川は、翌日の反省会の下見があるので断腸の思いで山登りをあきらめ、かねて気になつていた五日市のうどん屋「初後亭」を訪ねた。地元に伝わる「引きずりだじうどん」を着に、五日市の地酒「喜正」を少々い

ただいで数馬行きのバスに乗った。

宿では、まずは疲れた肉体を温泉でいたわり、それからサッポロ・ビールの自動販売機を往復しつつ夕食を待った。待ちながら、遠藤さんが腰の痛みを訴えた。すかさず本間さんが「レッドキックホット」を取り出して、遠藤さんに勧めた。本間さんは、この鎮痛消炎軟膏剤に一部から「ホンマキック」の異称が付けられているほどの愛用者。その本間さんからの勧めとあって、半信半疑ながらも塗ってみた遠藤さんだが、翌朝「痛みがなくなつたよ」と効果を認めた。そもそも「レッドキックホット」は、山本さんが三月会メンバーに広めたもの。ここでもまた故人の遺徳が、信奉者が一人増えた。遠藤さんは、キリマンジャロにこれを携行するはずだ。

この山行は、「(山本さんの)一周忌が近づいているが、追悼山行の予定はないのか」というご下問が石井さんから佐藤さん経由であつて、計画された。夕食は、当然ながら、その石井さんのご発声で故人へ献杯して始まった。ビール三本は軽く片付け、あとは熱燗派と常温派に分かれて、「喜正」を五人で一五合(遠藤さんはアルコールを控えている最中、三井さんは例によってビール党)。これなら一升瓶で注文すればよかつたと、幹事の蛭川は後悔した。

いつものことながら、杯を干せば話が弾み、話が弾めばお酒も進む。故人の思い出話に花が咲いたのはもちろんだが、針葉樹会のお話、来歴に詳しく、また物知り博士だった山本さんを偲ぶ行事にふさわしく、話題は戦中・戦後の山岳部のことや日本の古代史・中世史など学術のことにまで及んだ。本間さん曰く、話が、面白すぎて、またあまりに多岐にわたるので、覚えきれない」のだが、その一つを紹介する。

二〇〇一年一二月の畦ヶ丸懇親山行(幹事:高橋、参加者:佐藤・高崎・山本・三井)のときのこと。佐藤さんが「ついでに大室山に登ろう」と提案したところ、山本さんが即座に「ナンチクさんには無理ですよ。それで矢倉岳に変更したが、時間が余つたのでさらに不老山に向かつた。そこでトップをつとめた高崎さんはめつぽう速いスピードで登つたのだが、山本さんはうんと遅れ、頂上でも無言であつた。かくして薩摩男児としての鬱憤を晴らした高崎さんだが、宴席でそのときのことを振り返つて「山本の荷物が重かつたんだよ」と故人を庇つた。たしかに、どんなに小さい山行でも、山本さんは装備・非常食などの携行品に手を抜くことはなかつたと思う。なお、このエピソードにはさらに面白い後日談があるようだが、それは聞き落とした。

翌二七日は、足を痛めた石井さんは下山することになった。高崎さんが石井さんに付き添つた。残つた五名は、南秋川に注ぐ南沢の左岸の支尾根をその日の最高点である檜寄山(1188m)へと向かつた。この顔ぶれでコースタイム(90分)を守れなかつたのは、前夜の湯疲れ、飲み過ぎ、笑い過ぎからだろうか。

檜寄山は標高の割には展望が良い所だが、あいにく天気は曇。笹尾根の途中では雪が霰かに打たれ、あわてて雨具を着ける場面があつた。昨夜、酒とお喋りに夢中でN気象予報士のご尊顔を拝さなかつた報いだろうか。本間・蛭川両名は、この天気に意欲が萎え、浅間峠まで縦走する予定を笛吹峠で切り上げ、檜原街道に下つてしまつた。三井さんは、少々物足りない思いをしたようだ。

さて、下見しておいた「初後亭」での反省会。途中で電話したら、店じまいをするところだが特別に開けてくれるとのこと。ここは、小麦粉も蕎麦粉も野菜もすべて自ら栽培している。まさに、最近喧伝されている地産地消を実践している店だ。メニューにない澤乃井の本醸造生原酒「朝懸けの酒」が美味しかった。ビール党の三井さんも、ここではお猪口を要求した。今は休肝中の遠藤さんまでが一

口含んでうまいと言った。その昔は相当に聞こし召していた遠藤さんだけに誘惑に駆られたはずだが、運転があるので先に帰った。

酔うほどに、話は山本さんと一木会、三月会（以下、合わせて「三月会」）のことになった。山本さんの助言を受けて実施された、比較的大人数の山行が次々と思いつこされた。第一回が宮之浦岳、続いて利尻山、平ヶ岳、白山、沼津アルプス。これらは、「針葉樹会懇親山行」のように公式行事として会則で認知されたものではないが、さりとて純粹の個人山行でもなく、いわば「三月会山行」とでも呼ぶべきものだ。いずれも、三月会の場でアイデアや構想が生まれ、有志が山本さんと相談しながら計画を固め、ときには三月会の枠を越えて針葉樹会員全員から参加者を募り……という形で実現させたものだ。当初は、三井さんが推進し、定着させてきた。その後、山本さんに鼓舞されて、三井さん以外にも世話役が現れ、二ベソツ山や、二回目利尻山、二年がかりの越後三山が実現した。来たる八月に中川さんを総大将として本間さんと金子さんが推進に当たる「北岳道遙計画」も、「三月会山行」のカテゴリーに属すると思う。

三月会を基盤にしたこのような活動を評して、「針葉樹会員を山に連れ出す仕組みを山本さんが）作ってしまった」と倉知さんが書

いた（『針葉樹会報』一〇九号）。本当にそのとおりだ、この流れはなんとか継続させたいと思いつながら、五日市駅に向かった。

あの頃、これから。

高崎 俊平（昭41年卒）

富士山

アンデスもカラコルムも知らない人間が、山登りの報告をするすれば、富士山から始めさせてもらっても良いのかも知れない。

最近、富士山に登ったのは2001年の夏の事だ。職場が変わり、気分転換・体力測定も兼ねて登ってみた。勤務の関係で、当時は麓の富士市に単身赴任していたので、最も手近な山だった。

7月7日の早朝、富士市の家を車で出発。便利な世の中になったもので、途中のコンビニに寄れば、朝早くても、握り飯も飲み水も非常食用のチョコレートも難なく手に入る。

富士宮口登山道は5合目まで車で上ることが出来、広い駐車場もある。山開きの直後だ

けに登山客もまだ少ない。6時に歩き始める。思い返せば、富士山との付き合いも長くなったものだ。

1年生の11月に、雪上訓練合宿で初めて雪の富士山に登った。当時は、富士吉田の駅からいきなり歩き出した。浅間神社の脇を抜け、森林帯を黙々と歩いた。大きな鍋・釜をキスリングの上に乗せて、辺りが暗くなり始める頃、5合目の幕営地に着くと、新人は薪拾い。火山灰台地のような所に薪などあるものかと疑いながらも歩き回るとソコソコの枯れ木が集まった。

2年生の時には、頂上にテントを上げた。サポート・メンバーの助けを借りて頂上に幕営し、スリップ・ストップの練習をしながらお鉢回りをした。途中、不意に本番のスリップが起きた。残念ながら訓練の効果は発揮出来ず、3人とも平坦地まですべり落ちてしまった。後になって、航空写真で頂上の地形を良く見ると、極めて幸運な滑落だった事が判った。翌日は下山の予定だったが、天候が悪化して停滞。食料の予備が少なく往生した。

3年生の夏、富士山清掃活動が始まった。伊藤助成先輩の会社に多大の援助を頂き、「学生山岳愛好清富会」なる団体を組織して吉田口登山道の大掃除をした。当時4年生の小島和人会長以下恣意的に集めた都内の大学山

岳部・WV部から総勢60人余り、5合目の小屋をベースにして、3泊4日の清掃活動だった。麻袋にして約400ものゴミを担ぎ下ろし、燃やしたり埋めたりしたゴミの量もほぼ同程度、合計約8トンのゴミを処理した。当時は、新聞・週刊誌に小さく取り上げられただけだったが、20、30年遅ければ、環境意識も格段に向上し、反響も違ったものになっていたに違いない。この大掃除は3年続いた。そんな事を思い出しながら、好天の中を黙々と歩を進める。50分・10分のペースが段々小さくなり、10分・15分くらいになった所で頂上に着く。午前10時、約4時間の登りだった。頂上からは、場所にもよるが携帯電話が通じる。我が家に無事を知らせ、下りにかかる。約2時間半で駐車場に降りつく。翌々日から数日は膝が言う事をきかなかつた。

北穂高岳

2006年9月25～27日

私共1966年卒業の仲間自らを「穂橋会」と名乗っている。入部した年から、部として穂高山域を中心に活動する事が決まっていた。4年間を穂高中心に歩き回って、これを同期会の名前にした。オーション会・ヤロー会の活躍には遠く及ばないが。

2001年の9月末に原・池知と連れ立って前穂高に登った。岳沢小屋に宿泊し、2日がかりの山行だった。頂上に近づくとつれて霧が深まり、天候悪化、登頂後すぐに恐々下山した。それから5年後、初めて滝谷を一緒に登った仲間と念願の北穂高に出かけた。

25日、上高地から通い慣れた道を涸沢まで。明神池、徳沢園、横尾までの所要時間は昔とそれ程変わらない、が背負っている荷物の重さは全く違う。横尾の橋が随分立派になっている。本谷橋も本格的な吊り橋になっている。ここで昼食。向かいに横尾尾根が高く広がる。カールの底から小屋への道は長かった。涸沢ヒュッテに投宿。同行者のコネで従業員用の風呂を使わせてもらう。

26日、小屋を5時50分に出る。既に数パーティーが南稜を先行している。天候はゆっくり下り坂、9月末ともなれば降雪が気になる。南稜はこんなに急峻だっただろうか、と思いつながら一歩一歩。北尾根六峰の狸岩が段々低くなる。

学生時代、涸沢のテントから北穂高の頂上までは約1時間で登ったものだ。ザイル・三つ道具を背負って、岩登りを目指す他のパーティーと競いながら。今回は約3時間で頂上へ。見下ろす滝谷に人の気配は全く無い。墓場のようだ。

4年生の冬合宿で涸沢岳西尾根に登った。穂高小屋の幕营地から、涸沢岳の下り、涸沢槍の下りに手間取り、北穂高岳の頂上まで1日半かかった。翌日から4日間風雪に閉じ込められた。この悪天候の為、冬の第一尾根登攀を諦めたのだ。

思い出は尽きないが天候が怪しくなって来た。急いで南稜を下る。途中、一陣の粉雪に見舞われる。この日は横尾小屋に泊まる。小屋に入った直後から雨が降り始め、夜半にかけて強くなった。

27日、雨は日の出前に上がったようだ。ツアー登山客の多いには驚きながら、好天の中をのんびりと上高地まで下る。途中、奥又白谷の、遥か遠く高くに前穂高の北壁、四峰の正面壁が見える。もう、あの岩場に取り付く事もあるまい。

2007年の山

9月8日

私共が入部した時の4年生、高橋信成さんが針葉樹会報（一〇九号三月会通信）に書かれていた標高2007mの山、小遠見山に登った。麓の神城には大きな駐車場がある。ここから地蔵の頭の下まで、ゴンドラで上がる。その昔、春、重いキスリングでラッセルに苦勞して遠見尾根に出たものだ。ほぼ一日

がかりで登ったように思う。ここを約8分
上がる。

信州大学が管理する高山植物畑の中を登
る。地蔵の頭には遭難碑が多い。人影が少な
くなって、ゆるい傾斜の中をゆっくり登る。
下には、法政大学山岳部の小屋が見える。そ
の昔お世話になった頃より、一回り大き
なつたような気がする。遠見尾根の登山道
を少し外れて、2007mの小遠見山の頂上
がある。狭い頂上は10人も集まれば満員にな
てしまう。天気さえ良ければ、鹿島槍の北壁
も見えるはず。残念ながら眺望は効かなか
つた。昼飯もソコソコに、混み始め、小雨が落
ちだしたのを潮に下り始める。

10月13日

台風一過の晴天を見込んで出かける。今回
は、小遠見山を通り越して、中遠見山まで脚
を伸ばす。ゴンドラの頂上駅から小遠見山
まで約1時間半、ここから中遠見山までは約30
分。鹿島槍北壁がよく見える。針葉樹13号に
大賀二郎さんが書かれた詳しい概念図が目に
浮かぶ。下り、地蔵の頭を越える辺りで右大
腿部が攀つてしまう。だまし騙し下ると今度
は左側。痛みを堪えながらゴンドラ駅へ。こ
の年は紅葉が少し遅れた様で、三段染めには
早過ぎた。

蓼科山

学生時代にハケ岳は、北・南アルプスに比
較して魅力に乏しかった。また、ハケ岳と言
えば、南ハケ岳だった。無雪期・積雪期に赤
岳・阿弥陀岳等に訓練を兼ねて登った。

なだらかな静かな山容の北ハケ岳は、この
年齢になると、十分に魅かれる山々になつて
きた。白駒池、高見石、縞枯山等を巡り始め
た。体力の衰退を知る指標にもなるうかと、
このところ蓼科山に通い始めた。

2004年8月9日

この年の1月中旬に、最後の海外駐在と
なつた米国勤務から日本に戻つた。4月には
長年気になつていたヘルニアの手術をして、
身体で気になるところも無くなつた。5月
には新しい職場も決まり、生活も落ち着いて来
た。山登りを再開出来る環境も整つた。

8月の盆休みに家内と蓼科山に登つた。ス
ズラン峠の直前に女神茶屋があり、この小屋
の前に駐車場がある。直ぐ近くのバス停留所
が登山口になつている。夏の暑さを避けるべ
く早めに出発する。ここから登る蓼科山は、
大きく3段の急登があり、その間が緩やかな
ステップになつている。1段目は鬱蒼たる樹
林の中を登る。2段目になると、所々に岩が
現れ高度を稼ぐ。3段目の後半は頂上に続く

岩山になる。頂上直下に蓼科山頂ヒュッテが
あり、何かの時には心強いだろう。約3時間
で頂上に至る。シーズン真っ盛りで好天にも
恵まれ、多くの登山者が続々と上がつて来る。
圧倒的に我々のような中高年登山者だ。下り
は急な傾斜に気をつけながら慎重に下る。約
2時間半かけて登山口に降りつく。

2005年5月3日

ひよつとしたら残雪が踏めるかも知れな
い、と思つて出かける。登山口着5時半。既
に先行者がいるようで数台車が停まつてい
る。期待したほどに天気は快復せず、今にも
降り出しそうな気配。今回は単独行なので、
少しピッチが上がる。2段目の急登の途中か
ら残雪を踏むようになる。但し、南面の登山
道だけに凍結は無い。頂上は濃い霧で眺望は
全く効かない。寒い中、握り飯とテルモスの
コーヒーとで軽く腹ごしらえして、直ぐに下
りにかかる。2時間弱でバス停に着いた。

2005年5月6日

今回はルートを変えてみる。竜源橋に小さ
な駐車スペースがあり、ここに車を停めて、
滝の湯川を遡る。余り人が入っていないよう
で、ルートの判然としない箇所がある。天祥
寺原の先で左の沢筋の道に入る。途端に残雪
が多くなる。この分岐まで登山口から約1時
間、ここから將軍平の山荘まで約1時間の行

程。山荘から頂上に至る斜面は残雪に覆われていて手ごわい。ピッケルを持参していなかったたので、代わりに畳んだ雨傘とフィックス・ロープとを頼りに頂上へ。今回も眺望は全く効かない。山荘への下りは恐ろしいので諦め、雪の少なかつた南斜面の登山道を下る。約1時間半で。バス停から電源橋までの舗装道路のガラガラ坂が長かつた。

2006年5月4日

前年のように残雪の具合が適当であれば、家内にも雪の頂上を踏ませてやれると出かける。女神茶屋の駐車場を出たのが6時過ぎ。連休の中日ともなれば登山者は多い。この時期、冬山を思わせる装束の中高年も多い。ピッケルもアイゼンも用意せず、手強くなつたら引き返すつもりで登り始める。3段目の急登の途中で残雪が手に余り始めたので引き返すことにする。家内とのやり取りを聞いていた人から「この時期、アイゼン・ピッケルは必需品だよ。少しは投資しなくちゃ」と助言を貰つた。

2006年6月3日

今年は残雪が多かつたようだが、6月ともなればもう大丈夫だろうと家内と再挑戦。駐車場を出発したのは6時半。第2ステップの緩傾斜帯から所々残雪が現れ始めるが気になる程ではない。中にはアイゼンをつけ始める

パーティーも出て来る。頂上着9時半。約3時間の登りだつた。今日は、風は強いが、眺望が素晴らしい。北は白く輝く穂高連峰から白馬まで、乗鞍、木曾御岳、中央アルプス、南は仙丈・北岳・甲斐駒の景観を堪能することが出来た。念の為に将軍平に下るルートを見ると、また雪に覆われ、とても降りる気にはならない。10時には頂上を後にして、12時半には駐車場に降りつく。

2007年7月8日

夏山シーズンに入ったといつてもまだ日が浅く、登山者の数も多くはない。6時少し前に女神茶屋前の駐車場を出発する。一人なので自分のペースで登ることが出来る。約2時間で頂上へ。頭上に雲は無いのだが周囲は霧で眺望は効かない。暑くならないうちにと先を急ぐ。1時間半で下りついた。出会つたのは、単独の人が4人、ペアが2組、7人連れのツアーが1組と比較的静かな山行だつた。

体力測定の見点で見ると、登りの所要時間は、一人の時間が2時間強、家内と二人の時間は約3時間、下りは一人の時間が約1時間半、二人の時には約2時間半となっている。所要時間は、歳と共にこれからどんな風に変つていくのだろうか。

(蛇足) 茶白山

2008年3月8日

麦草峠を越える国道299号線は、冬季間は氷雪のため通行止めになる。茅野側は標高約1800mの蓼科・八ヶ岳国際自然学校のある所で折り返す。ここに車を停めて茶白山に登つた。駐車場を7時半過ぎに出発。気温は氷点下12度だつた。昨シーズンの終わりにネット・オークションで競り落としたスノーシューを履いてラッセル。土地勘の乏しい家内を騙し騙し登る。途中「五辻」の東屋で大休止の後、11時20分には茶白山頂上という標識のある地点から少し西の展望台に到着。移動性高気圧にすっぽり覆われたお陰で、雲ひとつ無い青空の下、北・中央・南アルプスの山々が一望出来る。

急な斜面を下りきると麦草峠へ、行き交う人が多くなつた。この間1時間弱。ここから風の抜ける車道を少し下って、再び樹林の中の踏み跡を辿って自然学校へは約1時間。今年は2月に入つてからの積雪が多かつたようで、久しぶりに適度のラッセルが楽しめた。

「エーデルワイスの歌」外聞

金子 晴彦（昭46年卒）

山に行ったら必ず歌う法政大学山岳部部歌「エーデルワイスの歌」、その定本は何かについて識者の間でひそかに調査が進められたのを「ご存知だろうか？」とら声で歌うばかりではなくたまには歌の生い立ちに思いをいたし、新たな気持ちで歌ってみよう。

発端 ある山好きの男が「歌詞を忘れたから教える」と山仲間にもイルしたことからの調査は始まった。

初動 これを受けた好事家が古い歌の本を調べたところ「現代青年愛唱歌集（昭和37年 あかつき書房）」と「たのしいコーラス山旅歌集」（昭和41年 社会思想社）に掲載された歌詞に微妙な違いがあることが発見された。たとえば、

エーデルヴァイス vs エーデルワイス

アルペンブルームン vs アルペンブルーム
山に憧る vs 山に憧れ
山より山と vs 山より山へ
たそがれ迫り vs たそがれ迫る

捜査 この程度であれば通常は「ヘーエー違うんだ」で終わるはずだが、この好事家（私の高校時代の山岳部同期生）はいささかしつこく、何で違うのか？ と法政大学山岳部OB会・山想会会長に公開質問状を出すにいたった。

新事実 調べものにはやはりしつこさは大切で、この質問に対し次の新事実が浮かんできた。

この歌は昭和2年に部歌として制作、発表された。その後大変有名になったので昭和36年に日本音楽著作権協会に登録され、著作権信託契約を締結した。こうすればこの歌の歌集やレコードが販売されると著作権料が入ることになる（当初5年の平均は年間9万円。山岳部でこんな収入があるとは！）。

登録の折、作詞者の菅沼達太郎氏は健在で歌の経歴はまとめられたが、作曲者の小林三郎氏は連絡がとれず、法政大学交響楽団の美人バイオリニストに楽譜をまとめてもらった。ところがである。登録された歌は実は当

初の歌とは違っていたのだ。出版社の歌集の間の違いなどという問題ではなく、法政大学の内部で違っていたのだ。たとえば、

歌の順番 冬春夏秋 vs 夏秋冬春結び
黄昏迫る vs 黄昏迫り

寒月凄く vs 寒月鋭く
エーデルワイス vs エーデルワイス
行方も知らず vs 行方も知れず

無論これと先にあげた二つの歌集の間にもさらに違いがある。

告白 一体どうしてこういうことになったのか？ これに対し山想会会長は山屋らしい告白をしている。「私どもは歌詞や曲、または歌の順番の違いなどは特に気にしておりません。いろんな人に親しまれ歌われていることが喜ばしいと考えます。曲や詩歌が少しばかり間違っただけでもないかと思っております」。

再捜査 好事家は新事実に奮い立ち捜査の手はますます厳しくなり、状況証拠を尋ね歩いた。この努力には敬服するしかない。そして次の新々事実が発覚した。

つまり、「当初の歌の順番は冬が一番に

なっている。それは、初代部長の田部重治氏が大変バイオニア精神に富んでおり、常に雪山に照準を当てており、作詞者の菅沼氏がその気持ちを深く汲み、一般には春から始まるものを敢えて冬から始めたためである」という内容だ。

ところが、昭和36年に著作権登録した折にはこの順番は夏秋冬春に変えられている。そしてその理由は「先輩方に確認したところ昭和5年頃より既に夏が一番になっていた。一般的には夏が最もよく歌われていた」というものだった。

当初の「冬から」という流れは「夏から」という流れに変えられたのである。しかも通常の春夏秋冬ではない。どの季節から始まるかで歌の雰囲気は大きく異なる。そのことに関心を持ち、節目節目で対応してきた関係者の鋭い感性の存在。これは再捜査によって見出された大きな発見だった。

結末 一好事家の捜査努力により様々な事実が見いだされたが、最後に決定版歌詞を掲げてこの外聞の結末としよう。これは1997年に山想会総会で改めて整理された、いわば第3番目の歌詞である。この背景に思いをいたしながら改めて大声で歌っていたきたい。

傍点がついた部分は当初の歌詞と異なる部分である。

夏 エーデルワイスの 花ほほえみて

鋭き岩角 金色に照り

山は目覚めぬ 夏の朝風

乱雲おさまり 夕空晴れぬ

命のザイルに 我が身を託し

思わず仰ぐ アルペングリュエーン

秋 星影さやかに そら澄み渡り

葉末の露に 秋立ち初めぬ

金と銀とに 装いこらし

女神の如き 白樺の森

紅燃ゆる 山より山と

行方も知れず 漂泊いゆかん

冬 吹雪は叫び 黄昏迫り、

求むる小屋の 在処も知れず

ああこの雪山 重畳として

シーファラーの 行手をとざす

ああこの雪原 寂寞として

寒月凄く シュプールを照らす

春 雪は消えぬ 春は来ざしめ

風は和みで、日は暖かし

氷河のほとりを 滑りて行けば

岩かげに咲く アルペンブルーメン
紫香つ 都をよそに
山にあこがる 若人の群れ

結 嗚呼玲瓏の 雪の高嶺に
心静かに 頂に立ち

貴き山の 教えを受けん

身も魂も 汚れは消えて

永遠に輝く 白光の裡に

清き幸をば 求め得らん

なおついでながらドイツ語の意味は次のとおり。

Alpenblumen ヲがついて複数。アルプスの

花々

Schnee/Schneeflocken スキーヤー

NHKスペシャル

「白夜の大岩壁に挑む」制作余話

白石 章治（昭61年卒）

さる1月7日に放送されたNHKスペシャル

ル「夫婦で挑んだ白夜の大岩壁」で番組のプロデューサーを務めたが、これは10年かけてようやく実現した息の長い企画だった。

今回の番組は、「白夜のグリーンランド」標高1300mの前未踏の大岩壁に挑む「かつて世界最強と言われた」クライマーの姿を追った山岳アドベンチャー」という一面もあるが、本質的には「どんな困難にも決して挫けない不屈の意思をもった山野井夫婦を描いたヒューマンドキュメント」を目指したものだ。

これまで20年以上番組制作を続けてきた私は多くの著名人を取材してきたが、山野井泰史・妙子のふたりは、「これ以上興味深い人間とは出会えない」と思えるほどのカリスマ的魅力をもった存在だった。自分たちの山登りを追求することしか考えず、金銭への執着や物欲もない不思議な夫婦だった。番組の中で「夫婦の価値観は一緒。山にはお金はかけるけど、ほかのことはどうでもいいです」と言い切った妙子さんの言葉に二人の生き方が象徴されている。

山野井夫婦と初めて出会ったのは10年ほど前、私が泰史氏に「ヒマラヤで本格的な山岳ドキュメンタリーを作りたい。エベレスト初登頂50年を記念して、世界最高峰を無酸素単独で登る番組をやらないか？」と企画を持

ち込んだのがきっかけだった。この時のことは沢木耕太郎氏の『凍』に記述がある。

「1年ほど前に、NHKから正月番組としてエヴェレストを無酸素で登るところを撮らせてもらえないかという企画が持ち込まれた。

モンスーン前と後の二回、山野井がエヴェレストをひとりで登るところを、ハイビジョンカメラで撮りたいというのだ。エヴェレスト以外にもっといい山ありますよと言っても聞く耳を持たない。やはり『世界最高峰』のエヴェレストでなくてはならないらしいのだ。

しかも、彼らが望んでいるのはノーマル・ルートからの登攀だった。いまやエヴェレストのノーマル・ルートには、公募隊を含め、固定されたロープを使い、シエルパに酸素ボンベを持つてもらって登っている人が大勢いる。そのようなところを登るには興味がなかった。たとえエヴェレストでも無人のところを自力でラッセルしながら登りたかった。自分がしたいのは誰もいない壁を一步一步登っていくことなのだ。しかし、その思いをうまく理解してもらえないようだった。

山野井は説明するのを諦め、申し出を断ってしまった。

NHKに出れば、それも正月の大型番組に出れば、両親が喜ぶだろうなとちらっと思いはしたのだが。

それに比べれば、この民放の人物ドキュメンタリーの番組に出演することは、別にいやなことではなかった。クライマー山野井泰史の日常を撮りたいというこの番組のスタッフとは、どこかに気持ちに通い合うものがあった。

この記述には山野井夫婦の記憶違いと沢木氏の脚色があると信じたい。私が初登頂50年ということもあってエベレストにやや執着したのは事実だが、ノーマル・ルートを登って欲しいとは要望しなかった。西稜などバリエーション・ルートでもよいから泰史氏が登りたいルートを無酸素単独でお願いしたいと言った記憶がある（もちろん取材班はシエルパも酸素もフィクスロープも使うため、厳密には山野井の登山も単独とはならない）。また、著者の沢木氏が「民放」という在野を尊ぶ判官鼻頂的な気持ちから、NHKが悪者役を演じさせられている面も否めない気がする。もっとも私という人間が山野井氏から尊大な印象を持たれていた可能性も捨てきれないのならば哀しいが…。

結局、山野井夫婦が私たちの申し出を断った時、妙子さんが語った言葉に真実があると思う。「私（妙子）は（エベレストに無酸素単独で登ることで）泰史のクライミングを万人に理解してもらおうとは思わない。泰史のク



左端は山野井妙子、右端が山野井泰史

ライミングは世界のトップクライマー百人ほどに分かつてもらえば、それでいい」。

そして2002年、山野井夫婦は、ヒマラヤの難峰ギャチュンカンに挑戦、そこから生きて還るために手足のほとんどの指を失った。

山野井夫婦の帰国後、私は白鬚橋病院に見舞った。妙子さんは足の指2本を残して、それ以外の手足の指のほとんどを無くしたが、超然としていた。本当に肝が据わった女性だ。

大きな凍傷を負ったのが2度目だったから事実を受け入れるやすかったのかも知れない。また、妙子さんは泰史氏が続けてきた極限の挑戦が事実上終わったことが残念な反面、安堵したところもあると後日のNHKのインタビューで答えていた。

対照的に両手と右足の計10本の指を失った泰史氏は表面的には快活に振舞っていたが、シヨックの大きさはありありと感じ取れた。しかし、二人には世界の登山史に刻まれる先鋭的なクライミングをやり遂げ、最悪の気象コンディションの中で生還した、その代償としては仕方がないというサバサバした雰囲気もあつた。この時私を感じたのは「山野井泰史の超人的な高所に強い心肺機能は残された。壁は無理だが8000m峰の無酸素はできるかもしれない」という思いだった。

それから5年、NHKの内外を問わず複数の人から山野井の番組の企画が持ち込まれた。その度に私は「山野井氏の本番のクライミングが撮れるのなら番組やりましょう」と答えたが、どれも最後は山野井夫婦の同意が得られないという返答に終わった。

チャンスは山野井夫婦側からもたらされた。NHKスペシャル「極北の大岩壁」という北極圏バフィン島でのビックウォールクライミングを描いた番組を見た泰史氏から、

「ビックウォールならNHKが同行取材してもいい」という提案がなされたのだ。泰史氏の提案は「極北の大岩壁」を制作した映像取材部というカメラマングループに出されたため、当初、私は企画者に加わっていなかった。手足の指を失った山野井夫婦がロッキークライミングで大岩壁を登るというユニークな企画は、なかなか番組化の許可が得られなかった。当初の担当プロデューサーは山の番組の経験がなかった。取材で事故が起きる危険性が高いと判断していて積極的に企画を通そうとする気持ちがありませんでした。

当初の担当プロデューサーが番組化を諦めたと聞いた私は、再度、山野井氏と接触し、夫婦の番組化への強い意思を確認した。ようやく巡ってきた千載一遇のチャンスと踏んだ私は企画を書き直し大きなリスクを背負う覚悟で上層部を説得した。ここで沢木氏が著した『凍』が良い具合に作用した。上層部には沢木氏のファンが多く、ほとんどの人が『凍』を読んでいたので、「あの山野井夫婦を映像で見たい」という意見が圧倒的だった。NHKスペシャルの提案が無事採択されたと聞いた私は「これが本当の怪我の功名だ」と思わず苦笑いがこぼれた。

アジア往復旅行1年2カ月 ザ・トラブル

田形 祐樹（平6年卒）

私は、2006年10月から2007年12月にかけて、日本からトルコ・イスタンブールを往復する形で、ユーラシア・アジアの20カ国を旅した（最初の1カ月は、中村保さんらとの東チベット探査。これについては針葉樹会報一〇九号の中村さんと田形の稿を参考）。ここでは、トピックス形式に、4、5回に分けて、私の旅を振り返りたい。

初回の今号では、私が遭った様々なトラブル、ハプニングから印象深いものについて。

「日本大使館に電話してくれ」

アゼルバイジャンから国境を越え、イランに抜けようとしている時であった。国境近くで、警官に「パスポートを見せる」と言われた。警官は外国人のパスポートを見る権限はあるということ、国境近くは通常警戒態勢にあることなどを私も知っていたから、素直に

応じた。

その警官は、私のパスポートを見て「ビザの期限が切れている」という趣旨のことを言うではないか（実際には、そんなことはない。その後の、出国審査でもビザについては何ら問題なく、アゼルバイジャンを出国できた。税関で賄賂要求されたが、これは、突っぱねたら諦めた。立場の弱い？イラン人は払っていたが）、「はあ、賄賂を欲しがっているのか」と思った。彼は「署まで一緒に来い」と言う。本来、警察署まで行ってしまつと、もつと面倒なことになるし、逃れることができないので、ノコノコ警察署まで付いていくべきではない。しかし、パスポートを取り上げられてしまっているからどうしようもない。この時点で、私も、まずい状況になってきたと思った。

署内では、取調べを受けることになった。といっても、むこうはアゼル語及びロシア語で、英語は話せない。だから、お互い意思疎通ができず、もどかしい。むこうも苛ついてくる。「ロシア語が話せないのか？」とロシア語で聞いてくる（このロシア語だけは、旧ソ連圏の国で、何度も言われたので覚えた）。

私も必死になり、ガイドブックをひっくりかえして、なんとか「ビザは切れていない、誤解だ。かくかくしかじかだから、ビザは有

効だ」と言おうとするが、それにあてはまるロシア語はガイドブックに出ていない。仕方なく英語で話すが、通じるわけがない。

「日本大使館に電話してください」というロシア語は、ガイドブックに出ていた。ガイドブックには、外国の警察は、日本人を拘束すると、日本大使館に連絡する必要があると書かれていたし、日本大使館の館員に、電話を通して通訳してもらおうと私は考え、この言葉を警官に言ってみた。しかし、「だから、なんだ」という対応で、電話をしてくれる様子がない。ここから、大使館があるバクーまでは電話がかからないなどとも言つう。

次に、旧ソ連圏を旅行してきた日本人旅行者からもらった「国際人権警告書」を彼らに見せた。それは、日本語、英語、ロシア語で「日本大使館に連絡しないと国際協定違反である」というような趣旨が書かれている文書である。これは、公文書ではなく、勝手に日本人旅行者がワープロで作成した物で、旧ソ連圏に出没する不良警官対策のシロモノなのである。しかし、彼らは、これに対しても「だから、なんなんだ」という対応である。

八方ふさがりだ。この時点で、私はパニック状態になり、半泣き状態だった。その時は、このまま行方不明になつても、日本の誰も、自分に何が起こつたかわからないだろうな、

もしかしたら殺されるのではないかなど、最悪の事態も考えてしまった。あのようないつ解放されるかわからない状況では、そう思うのも無理からぬところがある。

むこうも、賄賂の申し込みをしない私に手を焼いたのか、取調べは一時中断。私は、警察署の入り口ホールに、椅子に座らされ晒し者状態で待機することになった。このときも、警官が監視でついていた。トイレに行くのも監視つきである。警察署に入ってきた地元のアゼルバイジャン人の多くが、私の方を、馬鹿にしたような、軽蔑したような言動をとっている。警官の一人は、私が必死でガイドブックをひっくり返して調べ物をしようとしている時に、私の顔とガイドブックの間に手を入れてきて邪魔をしたり、私の足を軽くこづいたりしたりする。

今回の旅で、このような仕打ちを受けたのは、後にも先にもこの機会だけだったので、非常に大きなショックを受けるとともに、恐怖を感じた。

しばらくして、中学校の英語の先生という人が通訳として来た。彼も交えての取り調べとなった。しかし、私が訴えたいことを、警察側にうまく伝えてくれない。

警察は、私のパスポートの全ページをチェックする。全く関係のないパンゲラデ

シユの出入国についてイチャモンをつけてくる。アゼルバイジャンは隣国アルメニアと現在も戦争状態にあり(停戦中)、アルメニアとは犬猿の仲である。私は、警官がパスポートを調べ始めたとき、アルメニアのスタンプを見つけるとまづいなあと思っていたら、案の定、見つかってしまった。彼は「なんでアルメニアに行ったんだ!」と詰め寄ってくる。「観光だ」。

通訳は「彼は非常に優秀で熱心な警官で、あなたのためにベストを尽くすだろう」などという趣旨のことを言う。私はガツクリしてしまった。彼は20分くらいいたら帰ってしまった。私は、彼が最後の命綱と思い、引き留めようとしたが、無駄であった。

その後、入り口ホールで座らされて、待たされることになった。といっても、いつまでこの状態が続くのか、次は誰が来るのか、など全くわからない。つかまったのが午前10時で、現在午後5時。考えてみたら、食事どころか飲み物もとっていないし、彼らもそれを与えてくれない。

やがて、上役のような人物があらわれ、「もついい。行け」という素振りをする。何の理由の説明もない。ああ、やっと解放された、という安堵感でいっぱいであった。もちろん、理由も聞きたいところだが、そんなことをし

たら、さらに向こうの怒りを買い、拘束が続くかもしれない。こんな所から一刻も早く離れるのが先だ、ということで、卑屈にも「スパシーバ」(ロシア語で「ありがとう」)などと言って、警察署から出た。

この件については、絶対に、バクーの在アゼルバイジャン日本大使館に文書で報告しようと思っていた。しかし、旅の忙しさにかまけて、旅の途中では報告せず、とうとう日本に帰国してしまった。当時、恐怖の中でも、担当者の方が名札でわかったので、それを指に書いておいてメモしておいた(メモ帳は没収されるかもしれないので、メモ帳には書かなかった)。

今回の件は、弁護士を職業としていく私には貴重な体験となった。いつまで続くかわからない拘束への恐怖、公権力の横暴そして言葉の通じない心細さ。

この件は、今回の旅で最大のトラブルかつクライマックスであったと言ってよいだろう。

破傷風怖い

カンボジアのシアヌークビルという町での話。

私は、バイクをレンタルして、田舎の道のドライブを楽しんでいた。スピードを出す



このレンタルバイクで飛ばしたが・・・

気持ちがいいので、だんだん調子にのってきて、スピードを上げていった。といっても、ここはカンボジア、舗装道路ばかりではない。近くに滝があるというので、そこへ行くことにした。

こんな調子でスピードを上げていると、やがて道は未舗装の、ダートの道へ。それでも、あまりスピードを下げないでいると、タイヤがダートにとられ、右半身から、体をブレーキにするように激しく転倒！

右半身からの転倒だったので、右手、右肘、右膝からかなり出血してしまっただ。服にも

べつとりと血が付いている。かなり痛い。傷に砂が入り込んでいる。どうやら、これは病院にいかないとまずそうだ。ここはカンボジア、破傷風も怖い。

そのまま、自分でバイクを運転して、町の中心部へ。どこか病院がないだろうか。バイクでうろろろしていると、なんとか病院を発見。といっても、大きな病院ではなく、小さな診療所といったところ。待合室が病室のようになっている、ベットで寝ている人もいるという、すごいところ。

私の怪我の様子をみて、病院の人もすぐわかってくれたようで、医者が来るまで待つているという。医者は、英語が話せた。これからすぐに、右膝の傷口を縫うという。私は、カンボジアで縫われるのは勘弁してほしいとも思ったが（医療器具を通じての感染症やエイズの感染！）、ここに至ってはそれも言っではいられない。手術台のようなところに乗せられ、麻酔をかけられたかどうかわからないが、縫合開始。さして痛くなかったため、おそらく麻酔の注射をしてくれたのだらう。消毒の方法は、傷口の上から、看護婦が消毒薬をポトポトとたらずすもので、下にダラダラと消毒薬がたれていく。なんとも原始的な方法。破傷風も怖かったため、そのための注射もお願いした。

以上で、しめて30ドルほど。30ドルは、日本の物価の感覚では、とても安いですが、カンボジアの物価基準では、実質300ドルになるのではないだろうか。

その後、事故を起こしたことが悔しいので、そのまま事故現場に戻って、記念撮影。そして、行きかけの滝にも行ってきた。

また、転倒のせいで、バイクにも少し曲がったところがあった。このままバイクを返すとイチャモンをつけられて、高い修理代を請求されるおそれがある。そこで、自分でバイク屋をみつけて、修理してもらった。6ドル。

そして、自分の怪我は服で覆い隠し、何食わぬ顔で、レンタルバイク屋にバイクを返却したのは言うまでもない。

暴動発生に感謝？

インドのデリーから、パキスタンとの国境に近いアムリトサルという都市への、寝台切符がやっととれた。ニューデリー駅には、外国人向け窓口があり、比較的すいているが、それでも切符を自分でとるのは結構面倒くさい。やれやれである。

そして、その夜、ゲストハウスをチェックアウトして、ニューデリー駅に向かい、列車を待つ。ニューデリー駅は、日本だと東京駅にあたる中心駅であるうか。しかし、そこは

インド。子供がプラットホームから小便をしているし、夕方薄暗くなってくると、大量のネズミが現れてくる。まあ、インド旅行を続けてくると、こういうことにも慣れてきて、いちいち驚かなくなるのだが。

それにしても、いつまでたっても列車が来ない。インドの列車はダイヤどおり運行しないのは、つとに？有名である。ダイヤ上では午前8時の列車が、午前8時1分に来て「時間になかなか正確だな」と思っていたら、「これは、本来一日前に来るべき列車だ」というジョークがあるくらいらしい。だから、少々遅れは想定内である。

しかし、それにしても遅い。駅のアナウンスは、一応ヒンディー語と英語で行われているが、英語では、この列車の遅れについて何も説明がない。怖いのは、インドの鉄道では、列車発着直前に、番線が変更されることである。ヒンディー語だけのアナウンスではわかるはずがない。そこで、時々、近くのインド人に確認していた。

しかし、やがて、どうやらこの列車は、今夜はキャンセルされたことがわかった。この列車の始発駅付近の地域で暴動が発生して（カーセントに関するもので、日本の新聞などでも少し報道されたい）、駅が焼かれるなどしたためらしい。せつかく苦勞して切符を

とったのに、がつくりである。

今夜は列車に乗るのは無理ということ、また、安宿街に戻って、宿探しをしなければならぬ。そして、暑い中、長い長い列に並んで、インド人にもまれながら、払い戻し手続きを行った。朝までに払い戻し手続きを行わなければならないという。これには外国人窓口もない。

こんなことで、思う通りにいかないインド旅行であるが、次の日に乗った特急列車でインド人紳士に会い、彼の家に4泊もさせてもらうことになった。素晴らしい体験であった。このことは、また稿を改めて書こう。

上記の暴動が発生せず、私が当初予定の夜行列車に乗っていれば、彼には会わず、すばらしい体験をしなかったことになる。人生万事塞翁が馬、トラブル、ハプニングにも感謝といったところであろうか。

.....

なお、この旅行や私が書いた内容についてのご感想・ご意見・ご質問、または書いて欲しい事項など何でも、お気軽にメール下さい(yuukitagata@yahoo.co.jp)、必ずお返事いたします。

また、この旅行についてのレジメを作成していますので、ご希望の方にはメールにて送ります。お知らせ下さい。

九州の山

淵沢 貴子(平8年卒)

新聞社に入って最初の任地・宮崎にいたころ、ここに「九州山登り小話」という文章を寄せました。皆さん覚えておられますか？

あれから7年。宮崎の後に佐賀、久留米、福岡と転勤を重ね、九州の山はほぼ登り尽くした感があります。「ここを登らずして九州の山を語るな」とも言える屋久島・宮之浦岳や祖母山、開聞岳の山頂にも立ちました。東京を経て前橋に転勤している身で何だかなと思いますが、九州の山の魅力の一端をご紹介します。どうぞご期待ください。

福岡から高速で大分を目指し、さらに延々と一般道を南に下り、大崩山(おおくえさん)の登山口まで合計約4時間半。いやー遠い。嫌になるくらい遠い。九州随一の名峰に立ちたくて、ひたすら車を走らせたが、運転だけで疲れてしまう。

おまけに、急登にさしかかったところから雨粒が落ちだし、まもなく豪雨に。川と化した

登山道、気分も土砂降り。引き返そうか…と迷ったが、何となく決めかねているうちに道が二股に分かれた。左は見晴らしの良い岩稜、右が一般の登山道。「どーせ雨だし」と右へ。しばらくしてまた同じような二股に来た。そのとき、急に小降りになった。今度は左へ。すぐに岩場に着き…言葉を失った。

風に乗ってふわりと上空に浮き上がった雲の下に秀麗な花崗岩が屹立していた。松の木の立ち位置がまた絶妙で、「誰か植えたる？」と言いたくなる。登山ガイドを飾る定番の光景だが、本物は迫力が違う。水墨画のように美しい、鈍色にくすんだ峰峰に一人立っていると、感動つてこういうことだよなあと思えてくる。

現金なもので、俄然力が湧いてきた。あえぐような急斜面に登りに登る。時々岩稜帯に出て視界が開けるので、実気分が良い。樹林帯をトラバースし、水場があるだけの幕営地に着く。やはり人つ子一人いない。ここが九州の良いところだ。とにかく人がいない。面白いことに平らな岩場の先は垂直に切れ落ちている。ちよつとよろけたら落ちこちそうな断崖絶壁だ。深い谷を挟んだ正面には登ってきた稜線が一望でき、えも言われぬ開放感が胸に広がる。

翌朝、その稜線が朝日に赤く染まるのを堪

能し、山頂へ。見えるのは深い森に囲まれた山並みだけ。これがまた良いんですよ。

下りは一般の登山道を外れ、沢へ。大崩山周辺は花崗岩帯なので、沢が実に美しい。どこも絵になるので、写真ばかり撮つてちつとも前に進まない。広々とした一枚岩の川床を、薄い透明の絹のように水が滑る。と思うと、豪快にしぶきを上げて滝となり、エメラルドグリーンの渦になる。余りに楽しくて馬鹿みたいに笑いがこみ上げる。

いやー良かった、満足満足…と、上機嫌で近くの公衆電話から本社の休日当番に電話。「無事下山しました。何か変わったことはなかったですか？」「Yに1面で抜かれてたよ。こつちでやつといたから」

まじですか。青くなつて車を飛ばす。が、途中で睡魔に襲われパーキングエリアで熟睡。気が付いたら午前2時。もうどうにもこうにも…。いいのか、こんなんだ。

懲りもせず、今度は沢登り。前回ご紹介した『九州の沢と源流』で、巻頭8頁のカラー写真の半分を占める尾鈴山系の沢。美溪ぶりは尾鈴山登山の時に分かつていた。しかも！初級・中級向けの沢が何本も。とってもお買得。これを攻略せずして九州を離れるわけにはいかんつ、と気合を入れて入渓。やつぱり誰もいない。釣り人すらいない。

ナメのきれいな甘茶谷でウォーミングアップし、翌日ケヤキ谷へ。ごめんなさい勘弁してください、てくらの超どかゴロ帯(大げさです、でもそう思った)を抜けると、見上げると思わずお口ぽかんになる大滝が所々に姿を現す。

しめが落差120メートルの白滝。龍が駆け昇るがごとく、岩肌を躍動し、しぶきを上げる姿が美しい。さらに良いのが、途中まで楽に直登でき、滝の下をくぐつて対岸に渡ってから巻き上げるルートになっていること。高度感抜群、緊張はするが足場はしっかりしているのでザイルは不要。水を浴びて対岸に出たとき、爽快感に思わず叫んだ。巻き道の胸付く急登も樹林帯なので恐怖感はなく、滝上は別世界のようなナメ。藪こぎもなく、登山道に出た。もう最高、最高です。

こういう、お手軽さに似合わない満足感が九州の山の魅力だ。例えば開聞岳。海に突き出たミニ富士山のでたちで、わずか1時間半の登りだが山頂からの眺めと開放感は素晴らしく、コストパフォーマンスは日本一かもしれない。

5、6月のミヤマキリシマの盛り、鮮やかなピンク色に埋め尽くされた九重山群の大船山(さふね)平治岳や指山(さしやま)三俣山。北国育ちの私は「こういう世界もあったのか」と衝撃を受け

た。福岡から日帰りできて温泉も豊富なので、毎週のように通い詰めた。

東京からわざわざ行くのはちよつとねとは思うけど、いやー良いですよ、九州。5年くらいは飽きません。なので、湯布院や黒川温泉などの名湯と抱き合わせて山にもちよつと登ってみようかしらと思つたら、後悔はしませんので、皆様もぜひ。

中村保さんが王立地理学協会からメダル受賞

ドイツ語版「チベットのアルプス」出版

中村保会員のヒマラヤの東——チベットのアルプスでのご活躍は世界的な業績として米国・英国のアルパインワールドは勿論、いまやグローバルに広く認められていますが、今回さらに嬉しいニュースが同会員から寄せられましたのでご報告しお祝いを申し上げますと思います。(編集部)

英国・王立地理学協会 Royal Geographical Society (RGS) よりこの度「Busk Medal2008」授与の通知を受けました。メダルの授与式は来る6月2日にロンドンの協会本部で開催される年次総会において行われます。

王立地理学協会は大英帝国の海外進出・植民地支配の情報収集拠点としての役割を担ってきた170年の歴史をもち、その膨大なアーカイブスは世界に冠たる存在です。同協会は地理学に関連する業績(学術的な研究、フィールド・ワークから探検・リサーチ・登山まで広い分野が対象)に対し、毎年、次の4種類の Medal (Four Senior Awards) を授与しています。

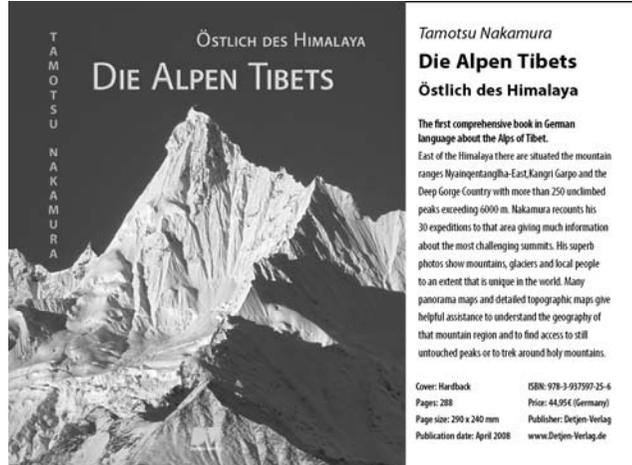
① Founder's Medal ② Patron's Medal……女王陛下の賞 (Gold Medal)

③ Victoria Medal ④ Busk Medal……王立地理学協会の賞

歴史に名前を残した著名な探検家は② Patron's Medal を受賞しています。登山家の Chris Bonington, Doug Scott, Harish Kapadia が受賞しました。中村が受賞したのは④ Busk Medal で「ヒマラヤの東——チベットのアルプス」の探検と地理的調査が評価の対象です。

1999年にUIAA国際山岳連盟の現会長 Mike Mortimer さんが授与されていますが、他のメダル同様、に受賞者の大半はアカデミックなプロフェッサー(専門家・研究者)です。この Busk Medal は Sir Douglas Busk (すでに故人)の寄付により1974年に創設されました。Sir Busk は各国大使を歴任した高名な外交官であり、マウント・エベレスト基金の初代会長、王立地理学協会とアルパインクラブの副会長を務めました。シンガー・ミシン会社の資産家一族です。

王立地理学協会に中村を推薦してくれたのは、英国登山界の重鎮 George Band さん、アルパインクラブ前会長 Stephen Venables さん、ヒマラヤンクラブ前副会長 Meher Mehta



ドイツ語版「チベットのアルプス」カバー

さんの諸氏です。

授賞式には中村のゲストとして『ヒマラヤの東—チベットのルプス』の出版社、Dejten-Verlag（ハンブルク）の Pedro Dejten さんも出席し、最初に出すドイツ語版とヒマラヤの東と念青唐古拉山東部の山峰図を協会に贈呈します。

王立地理学協会のメダル受賞は日本人では中村が初めてです。この上ない名誉であり、ひとえに日本山岳会、針葉樹会、横断山脈研

究会のお陰です。

さらに、中村さんの著書がドイツ語で出版されます。再び中村さんのメールを以下に転記します。

ドイツ・ハンブルグより近く『チベットのアルプス—ヒマラヤの東』を出版（最初にドイツ語版、続いて英語版）します。ドイツ語版はほぼA4版、288頁、ハードカバーの豪華本です。価格は44・95ユーロ（ドイツ）。テキスト、カラー写真260葉、概念図・地形図多数で構成されています。対象の地域は揚子江の西側で、念青唐古拉山東部、崗日嘎布、深い浸食の国（三江併流）です。これらの地域を総合的にカバーする世界で初めての本です。写真の90%は中村の写真です。

ドイツ語版と平行して、英語版も準備を進めており、こちらは三巻の構成で四川・青海省までカバーします。ドイツ語版の半年後から逐次出すことを予定しています。

新入部員紹介

経済学部 四年

原口 翔伍（はらぐち しょうご）

代表をさせて頂くことになりました。私立麻布高校出身。神武庸四郎ゼミ（文明史）に所属しています。中高では剣道部と囲碁部に在籍しており、趣味は読書とスキーです。公認会計士を目指して現在勉強中です。



前列左から 田平・尾上・中村、後列左から 原口・糟谷・大橋

経済学部 四年

大橋 義拓（おおはし よしひろ）

東京都立八王子東高等学校普通科出身。ゼミでは近現代東アジア社会史を専攻し、卒業論文では日本の「皇民化」政策と近代天皇制を扱う予定。趣味は音楽の鑑賞（ハードロックなど）。一橋大学社会学研究科志望。

法学部 四年

尾上 香奈子（おのうえ かなこ）

水野忠恒ゼミ（国際租税法）。鶴丸高校出身。最近ではフラメンコにはまっています。登山経験は小学校6年の修学旅行で登った韓国岳（だったかな？）ぐらいで、夢は富士山で朝日を拝むことです。よろしくお願いします。

社会学部 四年

田平 愛（たひら あい）

鹿児島県立鶴丸高校出身。久富善之ゼミ（教育社会学・教育調査）に所属し、教育調査に取り組んでいます。趣味は岩盤浴（ただ単に寝るだけ）です。癒しを求めています。

御茶ノ水大学 四年

中村 共芳（なかむら ともか）

鶴丸高校出身。大学では茶道をしています。が、中学高校ではテニスをしていたので体を

動かすのは大好きです。専攻は発達臨床心理学で、子供の発達や障害について学んでいます。現在卒論に向けて子供の育ちについて研究中です。

経済学部 三年

糟谷 知紀（かすや ともき）

岡田洋祐ゼミの所属で産業経済学を勉強しています。出身は愛知県、岡崎高校卒です。一橋山岳部は今年度入ったばかりで登山の知識などはまだまだ勉強途中ですが今後二年間精一杯やらせていただきたいと思います。宜しくお願いいたします。

懇親山行の報告

針葉樹会秋の懇親山行（矢倉岳）

2007年11月17日

参加者：石井、山崎、佐藤、中川、有賀、仲田、三井、高橋、蛭川、本間、三森、金子、川名、竹中（記録）

今年は何時もの蓼科のアドバイザー合宿から場所を変え、足柄峠近くにおむすび型のユニークな山容を見せている矢倉岳への日帰り山行が企画され、新松田駅前に集合、まずま

ずのお天気の下で実施されました。参加者は上記の通り40年近い年層の幅を持つ総勢14名でした。

西丹沢方面に向かう大勢のハイカーで賑わう小田急線新松田駅前で、山行幹事の蛭川、本間、金子さんの点呼を受けて9時36分の箱根登山バスで終点の地藏堂に向かう。

準備を整え標高400mの地藏堂を10時20分にスタートし、茶畑の間を縫って進む。明け方少し冷え込んだため用心に厚着をして来たメンバーも直ぐ上着を脱ぎ、ヒノキ林の間に緩やかな傾斜の万葉公園ハイキングコースを辿る。トップの本間さんのユックリしたペースで30分ピッチ2ピッチで足柄峠から矢倉岳への稜線に達する（750m）。

列の後ろの方では高橋さんからこの辺りの樹相や色々の樹の判別法などの講義に耳を傾けながら進む。この間全く他パーティーの姿を見掛けなかったが、稜線を進むにつれて前方矢倉岳から我々同様の中高年パーティーとのずれ違いが多くなる。12時20分に山伏平（720m）で少憩後、矢倉岳に向かっての本格的な登りにかかり、周囲の視界も開けてくるが、お目当ての富士山は厚い雲の中で、裾野が僅かに見えるだけだった。道の脇に季節外れのアジサイが唯一輪、その他ピンクのマユミや黄色いアキノノゲシ？などの花が目

ついた他、帰りには川名さんが黒い実を摘んで甘かったとの感想。

12時50分に矢倉岳頂上(870m)に着し、昼食タイムとなる。既に他のパーティーは昼食を済ませて頂上から下山した後だったので、ほぼ我々の独占状態だった。温かな陽射しの中でバーナーで湯を沸かし、幹事用意のスープ類、食後のコーヒーなどを楽しみ、近くの金時山から遠く大涌谷方面の箱根の山並みを望むが、残念ながら相変らず富士山は雲の中だった。記念撮影後13時45分に頂上を後にする。往路を山伏峠まで戻って、神奈川県立二十一世紀の森へ下山する。途中、山居場城址を横に眺め無縁塔脇を過ぎると直ぐセントラル広場に出る。ここから「天然の森コース」を下り、ホオノキ、ケヤキ、クスギ、カシワ、イロハモミジ、コナラ、アオキ、ソメイヨシノなどの樹の間を抜けて立派な森林館に到着。ここで電話でタクシーを呼ぶ間に、館員に誘われて暫時館内で見学。

3台に分乗して向かう先は松田町のお馴染み若松食堂。予約の時間よりも1時間近く早い16時15分に到着するが、既に予約席には当店自慢のマグロをはじめとする刺身の皿が我々を待ち受けていた。総勢14名入店の少し前に丹沢方面からの10名前後の別のパーティーが酒盛りを始めていたが、本間幹事の

お蔭で予約の我々が料理、酒とも圧倒。石井さんの首頭で今日の無事計画遂行を祝うと同時に先日ヒマラヤ6000m峰ダンブスピーク登頂に成功の金子さんを祝して乾杯。その後は地酒松美西や熱燗のお銚子が林立、旨い肴と酒で歓談が続く。特に席上でも来年の計画(北岳集中登山、荒沢岳など)が話し合われ、酒に関してはヤロー会の初参加仲田さんが充分に活躍されました。

お開き後、新松田で小田急に乗車時に金子さんがワンカップ大関とピーナッツを仕入れて飲み足りないメンバーに配布、車中も飲みながら話が弾み、海老名、町田と順次流れ解散となりました。健脚、健胃、健肝の皆さん、準備万端手配頂いた山行幹事さんお疲れ様でした。(竹中記)

「北岳道遥計画」へのお誘い

この夏 北岳に行ってみませんか？

この山は、中川さんが前号会報で触れられたように、小谷部全助先輩、甘利仁郎先輩が、それぞれバットレスの積雪期初登で活躍された所です。これらの登攀は日本の登山史レベルの快挙ですが、一橋山岳部としても、これ

まで合宿、縦走の対象としてまいりました北岳は郷愁の山です。この山は、年齢・体力、好みによって、いろいろな楽しみ方が出来ます。「北岳」にセンチメンタル・ジャーニーをどうぞ。

「北岳道遥計画」は、前編・後編に分かれ、前編は二つに分かれます。

前編 8月28日(木) 入山。周回・道遥組は白根御池小屋へ。バットレス組は付近にテント設営、その後偵察。

29日(金) バットレス登攀組は、バットレスへ。北岳周回組・周辺道遥組はそれぞれのコースへ。夜は懇談会。

30日(土) 下山。

後編 30日 縦走組 出発。

これまでほぼ決定したことは、

29日のバットレス登攀組が、2パーティー6人と決まりました。

6月22日に山田秀明(平15)さんの指導の下、つづら岩で岩登り訓練。

29日の北岳周回コースは、御池小屋、大樺沢左俣、八本歯のコール、北岳、小太郎尾根分岐、右俣、御池小屋 です。

途中バットレス登攀中のわがパーティーの

三月会通信

1月21日

「出席者」石井左右平、佐藤恭、三井博、遠藤晶土、高橋信成、蛭川隆夫、竹中彰、小島和人、西牟田伸一、本間浩（記録）

話題

トコトン富士

昨年「ぐるり丹沢」を完成させた佐藤さんの今年度の企画です。「ぐるり丹沢」は大山から、塔、蛭松洞を経て甲相国境尾根を三国山でぐるりと廻って不老山まで歩く。参加者延べ10人で、故山本健一郎さん最後の山行もありました。「トコトン富士」は今年未予定のキリマン、ジャロ行のためのトレーニング（高度馴化など）から拡大して富士山を成り立ちから、今の様子までことごとく知り尽くそうという、マコトに佐藤さんらしい試み。トレーニング山行は、富士吉田から五合目へ、宝永火口、お中道めぐり等々をお考えのようです。山の知識はこの会でも口頭試問形式でされるでしょう。

スター誕生

この会ではよく「神社」が話題になりますが、これまでは高橋信成さんの独壇場でした。そこに遠藤さんのデビューです。高橋さんが書齋派（？）とすれば、遠藤さんはフィールド派（？）で、全国の神

勇姿が拝めるかも。
周辺逍遥コースは、参加者と相談の上、決めることとします。

28・29日はバットレス組以外は白根御池小屋に泊まります。（1泊2食付き 7800円）。10名宿泊で予約。

30日からの縦走は、現在2パーティ決まり。

A 白根三山縦走

B 塩見から三伏峠まで縦走

この計画全体のリーダー、担当等

リーダー……中川滋夫

サブリーダー……竹中彰

バットレス登攀組/テント/懇談会担当

幹事……金子晴彦

周回・逍遥組/御池小屋/医療担当幹事

……本間浩

参加申込に期限は特に設けません。

宿泊状況により、申込受付を中止する事

になると思います。

天候判断は、各コースに任せます。

参加ご希望の方、お問い合わせは本間まで。

電話・FAX 045 544 6335

社廻りをされています。今日は浅間サン、コノハナサクヤヒメと富士にまつわる話をされていました。キリマンジャロ

今年末に、蛭川さんが幹事でキリマンジャロ行の企画進行中です。今日は山を下ったら、大地溝帯のナント力渓谷まで脚を伸ばし、人類発生の地をのぞいてみたいとのこと（もうちょっと行って経済人（カルタゴ）滅亡の地を訪ねられたら）。

足柄峠越え

昨秋の針葉樹会山行「矢倉岳」の帰り、矢倉沢往還が話題になりましたが、今日も話が出ました。箱根越えは富士の噴火により、ルートがイロイロ変わってきているだそうです。

山行報告

三井 1月19日 愛鷹連峰・越前岳 十里木

(1000)→越前岳(1230)→愛鷹登山口(1530)

晴のち曇、富士山パッチリ、雪5mアイゼン使用。

竹中 12月20→21、20日 籠坂峠→三国山→三

国峠 21日 石割山 ぐるり丹沢の最後。本間

さんも追試に合格（山崎、佐藤、蛭川、本間、

竹中、西牟田）。

1月5→7日 丹沢山→塔ノ岳（泊）→小丸尾根

宮が瀬→塩水橋から上部のブナ林の間を丹沢山

へ。塔ノ岳山荘では花立氏（管理人）から水8リットル

差入有り、水汲みを免れる（山荘にはしま茜を年賀差入）担ぎ上げた日本酒（一升瓶）で祝杯

（本間、竹中、他に昼から会メンバー2名参加）。

蛭川 12月20～21日 竹中さんと同じ。

1月8日 高麗山(平塚) ドッケシリーズの一環。渡来人上陸の様子を想像。

本間 12月20日 竹中さんと同じ。三国峠で皆さんと別れ、切通峠まで。翌日行った「ハリモミの里」が印象深かった。

1月6～7日 竹中さんと同じ。

西牟田 竹中さんと同じ。

2月18日

「出席者」 佐雑恭 中川滋夫 遠藤晶土 三井博 高橋信成 蛭川隆夫 竹中彰 本間浩(記録)

2月26日は山本健一郎さんの命日です。一周忌になります。私が山本さんと初めてお会いしたのは、5年前の丁度今頃大菩薩山行で、でした。集合場所に小柄なジイサマがいるので、誰だろう、雪の山で大丈夫かね などと考えていました。嚇々たる岳動の持ち主とは存じませす、失礼をは致しました。その時頂上は零下15度位で、小生脚が攀りとても峠まで行ける状態でなく、来た道を引き返ししました。帰りの車の中で、山本さんが、これは攀った時に塗ると効くよ、とレッドキックホットをわざわざ銀紙に包んで、渡してくれました。それ以来、マイ常備薬となり、いろんな山で活躍してくれました。THANK YOU! これが「縁」この会にも出席す

るようになり、山本さん最後の山行、「ぐるり丹沢」(第1回 檜洞丸(白石峠)をこ)緒することにもなりました。お世話になりました。有難うございました。

話題

山本健一郎さんの追悼山行

3月26日(水)、27日(木) 奥多摩 数馬の

「蛇の湯温泉たから荘」に泊り、翌27日に横寄山から笹尾根を歩く

キリマンジャロ

準備は着々と進んでおります。蛭川さん幹事の4月16日～17日、天子ヶ岳・長者ヶ岳(決起集会山行)。その後には佐雑さん幹事の富士吉田から五合目佐藤小屋、翌日精進湖に下る……と、脚力強化山行が組まれております。キリマン不参加でも、山行参加は可です。

トコトン富士

キリマンジャロの富士山トレイニングから話が始まった、佐雑さんの企画は「富士山検定」を経て「絵画(安藤公重、横山大観の富士、鑑賞)を取り込み、大型化してきました。

夏の山行予定

北岳パットレス、荒沢岳・平が岳

箱根越え

先月より引き続きのテーマ「ヤマトタケル以来、箱根の何処を、越えたか」。高橋さんからいろいろ説明がありましたが、どうも今ひとつはつきり

しません。

スター・えんどう

遠藤さんは、「神社」以外に日本のお城にも詳しく、「100名城」を今廻っているところです。そういうえば会報第111号でも、専門は城郭の石垣と書かれています。お奨めは小田原の一夜城だそうですね。お城と並行して、「世界100カ国訪問」も狙っているそうで、既に半分チョット行かれた由。

山行報告

佐雑 2月上旬 鍋割山 定例トレイニング

2月17日 権現山(高指山(不老山)本間さん、三井さん、蛭川さん、竹中さん、蛭川さんの姪の高橋結子さん)

3井 2月17日 権現山 雪があつてよかった

蛭川 2月17日 権現山

1月26日 奥久慈男体山 おもしろい山。本間さんアンコウをたらふく喰う

竹中 2月17日 権現山 権現シリーズの一環。意外に雪もあり、権現山頂以降はアイゼンを着け雪の上を歩くことに。途中でマウンテンバイクの一行に会ったのにビックリ。八王子の反省会も十分に堪能。

高橋 2月初旬 天台山(鎌倉)

本間 2月1～2日 塔ノ岳(丹沢) 友人、その息子と。表尾根から大倉尾根を下る。尊仏泊り 2月17日 権現山

3月17日

「出席者」石井 山崎 佐雜 中川 三井 遠藤
高橋 蛭川 竹中 小島 小野 中村 金子
本間(記録)

この会には初めて参加する中村雅明さん、札幌の
小野さんを含め14名のメンバー。話題も海外の山
から里山、学生部員の開拓から鎌倉古道までとバラ
エターに富んだもので、頭数と話の中身は大盛況で
した。

話題のひとつに「後期高齢者」がありました。75
歳以上の方を対象とする、新しい医療制度のよう
です。詳しいことは政府広報をお読み頂くとしまし
て、問題は「後期」です。この会に出席される「後
期高齢」の方々は、山歩きの現役ですから体力・脚
力・気力は充分お持ちで(なかには充分過ぎる方も
おられますが)、驚くべきは今お持ちの知識量と、
もっと深く、もっと広く知りたいという知識欲で
す。この方々を「後期」とお呼びしていいものでしょ
うか。「高期」のほうが似つかわしいと思います(そ
りゃ君「高貴」じゃないのかね 石井長老の口調
で)。

話題
キリマンジャロ

メンバーが確定しました。佐雜さん、中川さん、
遠藤さん、蛭川さん、小島さん、小野さんと蛭川さん

んの高校山岳部以来の岳友加藤さんの7名です。云
うなれば「七人の侍」というわけです。4月16日
17日の決起集会(長者ヶ岳から天子ヶ岳)を皮
切りに訓練登山が次々実施の予定です。

トコトン富士

山の部としては、2泊3日の予定で次のとおり。
富士吉田(五合目)佐藤小屋(泊)小御岳(精進
湖登山口)赤池(宿泊)周辺散策帰浜。時期
は5月下旬。鑑賞の部の「柿田川の湧き水」見学は
「箱根越え」とドッキングさせることになりそう
です。箱根八里、湯本から三島まで歩こうというわけ
です。日時・ルート等は未定ですが、どうやら箱根
峠からは鎌倉古道を通りそうです。

箱根越え

箱根越えの2本の道は 1「湯本」湯坂道「箱根
の関所」箱根峠「東海道、或いは鎌倉古道」三島
2「新松田」関本「矢倉沢」足柄峠「足柄の関所」
御殿場「ではなからつかと思われます。次はこれと
「富士山噴火」の組み合わせの問題です。噴火は、
800年 864年 937年 1032年 1
083年 1707年(宝永)にありました。どの
噴火が通り道を変えさせたのでしょうか?

丹沢 赤点線の旅

三井さんから丹沢の大山と大山三峰山を繋ぐ
ルートについて質問が有り、山崎さんから「道は微
かに残っているけど、ヤブこぎだよ」と。昭文社の
地図「28丹沢」には赤点線で、しかも「丁寧」に「迷
が二箇所も付けられています。丹沢党の私と致しま

しては興味有りありで、いい機会ですので三井さん
と一緒することに致しました。時期は秋の終わり
頃から冬あたり、草が枯れ、葉が落ちた頃でしょう
か。丹沢には赤点線で、歩いてみたい所が、これ以
外にも何箇所があります。例えば屏風岩山とか、日
陰山(ブツエ平)とか。「丹沢 赤点線の旅」と
称して歩いてみませんか。

北岳パトレス

時期と山行方法が決まりました。8月28日(木)
31日(日)31日は予備日。パトレスに登る「登
攀組」と縦走したり、お花を観にいたりする「逍
遥組」が白根御池で一緒に暮らして交歓しよう、と
いうものです。

山行報告

佐雜 2月20日 丹沢・弘法山 高崎さん、本間
さんと

3月 石垣山(小田原近郊)

高橋 3月12日 越生・大高取山 クラスメイト
と計4名

3月13日 湯坂道・浅間山 単独

蛭川 2月28日 丹沢・白山

4月13日 14日 予定の三四郎会の下見。竹中さ
ん、本間さんと

竹中 2月28日 丹沢・白山 蛭川さんと同じ

本間 2月20日 丹沢・弘法山 佐雜さんと同じ

2月23日 21世紀の森 樵のボランティア終
了後に。

2月28日 丹沢・白山 蛭川さんと同じ
3月5日 乾徳山 山仲間とその息子、計3名
金子 2月11日 丹沢・鍋割山 高校時代・香港
時代の仲間と大倉尾根を。

4月21日

「出席者」 山崎 上原 中川 三井 遠藤 高橋
蛭川 竹中 小島 高崎 金子 西牟田 山田
原口 本間

4時からの「北岳道遥計画」の打ち合わせに続いて「三月会」に出席された中川さんから「今取り組むべき課題は『針葉樹15号』の刊行ではないか」との問題提起がなされました。確かに1985年（昭和60年）以降の記録は正式に文書化されておりません。仕事が一番忙しい世代の方々が中心となつて作らないといけないわけですから、時間を捻り出すのが大変とは思いますが。とにかく、「かたち」を作ってしまうこと、ではないでしょうか。その点で、現在、金子さんを中心に立上げ計画が進んでいる針葉樹会ホームページのコンテンツに、残っている記録を取り込み、その記録集を中心に一冊仕上げては如何でしょうか（アルバイトを使つても）。出来たものに、追々足していけば良いわけですから。3年もすれば良い『針葉樹15号』が出来上ると思います。

今日は、年配者の欠席を補ったかのように、若手が二人出席しました。山岳部の原口翔伍君と平成15年卒の山田秀明さんです。原口君は、経済学部4年・茶道部兼で、4月5日の「花見の宴」に参加し、一橋山岳部に入部しました。同時に糟谷知紀君（経済学部3年、茶道部リーダー）も入りました。これで、コースチャさん（新たに針葉樹会加入）卒業後、部員が途切れることなく、存続できたわけです。

山田さんは、この夏の「北岳道遥計画」（後述）のバットレス登攀グループの内の1チームを率いて、四尾根に挑みます（彼は、自称「イワノボラー」です）。

本日のお話

初夏の懇親山行

5月17（土）～18（日）参加者23名＋アルファで、アタジジオは完全にパンクです。若手及び若手老人は別館泊まりになりそうです。

山本健一郎さんの追悼山行

「三月会」を生んで、育てた山本さんが亡くなつて一年になります。そこで会の常連メンバーを中心に追悼山行が企画・実施されました。

3月26～27日 奥多摩 数馬、たから荘、集合
参加者 石井 山崎 佐雑 高崎 三井 遠藤
蛭川 本間。

26日（石井 山崎 佐雑 高崎）生藤山、熊倉山、浅間峠、上川乗

（三井 遠藤）蛸口峠から三頭山をグルッと一回り（本間）戸倉三山の予定が道に迷い二山（刈寄山・市道山）のみ

27日（佐雑 三井 遠藤 蛭川 本間）「たから荘」西原峠、横寄山、笹カタワ峠、笛吹峠、笛吹北岳道遥計画

一橋山岳部ゆかりの地「北岳」に、いろいろな目的を持った人々が……バットレスに登る、北岳を往復する、お花畑を散策する等々……三々五々集まり、8月29（金）に一同に会し、北岳を、今日の成果を語り合おうという「北岳道遥計画」。先ず、バットレス4尾根登攀組のメンバーが固まってきました。中川、竹中、金子、山田秀、それにプロの今津さん。残り枠は1名。登山・道遥組は、今の処、仲田、西牟田、本間で、29日はバットレスの登攀振りを眺めながら北岳を周回することになります。

北岳には、S18年5月に石井さん他3名が登ろうとしたが、悪天で途中から引きかえした、とあります。バットレスには、S25年の夏合宿で東北尾根と第一尾根（？）に登っています。他にも、S28年には吉田さんをリーダーに中村保さん、平井さんが両保小屋をベースに北岳・間ノ岳に、帰りは仙丈を越えて戸台に出ています。北岳は思い出の山、懐かしい山です。皆さん、是非この山行に参加しませんか。

蛭が岳直登

塔ノ岳・尊仏山荘の花立さんの話では、30年前

には30キロの荷を背負って、この道を蛭が岳山荘までポツカした由。今は工専用の車道もスタスタで、しかも出だしの熊木沢出合のコンクリートの橋が壊れていて渡渉の場所探しからスタート。始めがすべてで、正にその通りの展開となりました。道と思しき所を歩きながら、4人で川原でははるか向こうの堰堤の赤ベンキを探し、山道に入れば痛くなる程首を上げて色の褪めた布切れを探す。蛭の頂上まで悪戦苦闘の5時間半でした。尚、このルートを登りたい方は、竹中さんの「記録」を読む事をお奨めします。

キリマンジャロ

キリマンジャロ参加者の総決起集会在、4月16日、田貫湖・休暇村富士にて開催されました。出席者は、佐藤、中川、遠藤、蛭川、小島、小野の6名で、先ず長者ヶ岳経由で天子が岳を往復、あいにくの曇り空で、富士の大沢崩れもよく見えなかったのは残念でした。その後のミーティングで、山行日程「10月7日～20日」と中川リーダー以下の業務分担を決めました。翌17日に、安全登頂を祈願する為、富士山本宮浅間神社と村山浅間神社に参拝しました。その社域・社殿の荘厳さにつたれ、身の引き締まる思いがし、改めて安全を誓いました。尚、その後佐藤久久さんが新たに加わり、総勢7名となりました。

山行報告

蛭が岳直登 4月1日 寄大橋～雨山峠～ユ-

シンロツジ

2日 ロツジ～熊木沢出合～第六堰堤～蛭ヶ岳
塔ノ岳
3日 塔の岳～大倉尾根～大倉
メンバー 竹中 本間 昼から会員2名
初日 玄倉林道通行不可のため、雨山峠を越える。2日目は10時間の歩きで尊仏山荘にたどり着く。

三四郎会(38年～43年卒の年次会)

4月13～14日 飯山温泉「ふるさとの宿」

大山 竹中 原口(学生) 佐藤力 吉川

ガスっていましたが、ほとんど雨に降られず無事に登頂できました。下りでの、他の方のスピードが

とても速くて驚きました(原口)

仏果山 本間 小島 中村 小野 糟谷(学生)

宴会にも新入部員2名(原口君、糟谷君)参加

奥多摩 3月19日 御嶽山～日の出山～三宝山

蛭川 竹中 小野

ケーブル連休のため歩き始めて、トラックに拾って貰う

三井 4月17日 オザク山(栃木県) 新「花の

百名山」でアカヤシオ・ハルノトラノオ・カタ

クリの群落を見る。低いが、ハシゴ・クサリの連

続で腕が痛くなった。

高橋 4月13日 仏果山～蛭ヶ岳(三四郎会)

14日 飯山白山(三四郎会)

蛭川 4月4～5日 大ドツケ 野生のフクジュ

ソウの群落を見てきた

高崎 3月8日 茶白山(北八ツ)メルヘン街道の

終点から五辻経由で、茶白山から表草峠へ。ス

ノーシューで快適な雪上歩行。

4月12日 車山(霧が峰)誰も居ない車山スキー

場から頂上へ。今回もスノーシューで。

金子 4月5～6日 日光白根 丸沼スキー場よ

りゴンドラで登り、その日の17時頂上下。雪が

多く苦戦。翌日湯元へ。

4月19日 多摩川ウオーク(30～)青梅から中

河原へ、一気に下る。

本間 3月22日 大楠山(三浦半島) 昼から会

員1名と。ジジ・ハイクの下見。昼は海岸でパー

ベキュー。

4月4日 権現山・弘法山 神積会ハイキング。

桜満開。昼のみそ汁も好評。弘法の里湯も結構

山田 4月13～14日 北ア 後立山 双子尾根

～杓子岳～杓子沢(滑)～長走沢(滑)

4月20日 後方羊蹄山(スキー)

山行予定

初夏の懇親山行 4月17日 茅ヶ岳(石原 上

原 塩川 中川 有賀 山本尚 仲田 三井 遠

藤 蛭川 小島 三森 佐藤久 斉藤 金子 西

牟田 前神 本間 高橋 小野 佐藤活)

18日 蓼科山 仲田 高崎 本間

霧訪山 石井 山崎 高橋 小野 中央分水嶺

上原 5月12日 箱根 神山 塩川、丸山と一緒

に。夜は温泉宿。

竹中 5月11～12日 乾徳山 本間 昼から会
員2名と

金子 5月12日 香港 八仙嶺

西牟田 4月25～27日 西穂 J A C 2 0 0 3

山行

山田 5月1～5日 千丈沢(滑)～北鎌尾根～飛

騾沢(滑) 2人で。スキーを担ぎ上げる。

5月19日

「出席者」佐藤 三井 高橋 蛭川 竹中 小島

小野 高崎俊 佐藤久 岡田 川名 11名

岡田さんは初参加で、高崎さんは仕事が一段落つ
き次第常連メンバーになれる予定。川名さん、お
久し振りで。前回同様、キリマンジャロと「ホー
ムページ」の打合せに挟まれた三月会で、双方に関
係の無い記録人は、フテクスアレテ酒を頂いておりま
したので、別段記録することもございません。

山行報告

懇親山行の内容は、針葉樹会報で詳しくお伝えす
ることとします。

4月30日 丹沢 佐藤 トレーニング、その後
は地酒とそば。

5月6日 茅が岳 蛭川 懇親山行のための下
見。

5月11～12日 乾徳山 竹中、本間、他2名(昼
から会会員、頂上直下の鎖場はナカナカのもの(竹
中)。高原ヒュッテ(避難小屋)の状況視察。頂上
直下のくさり場は難儀した(本間)。

山行予定

三井 6月上旬 草津白根山～四阿山～浅間山前
掛山)

高橋 5月末 大山の近くの山

蛭川 6月上旬 ベテガリ

竹中 5月31～6月4日 大峰山縦走(三二奥駆

山上ヶ岳～八経ヶ岳)

6月6～7日 日光光徳小屋周辺メトロ口会世話

人懇親会)

6月22日 つづら岩(北岳バットレスに向けて

のトレーニング)

小島 8月3～4日 富士山

小野 6月20日 日高アポイ岳

6月2日 丸山

5月25日 樽前山

本間 (大峰山 竹中さんと同じ)

111号の編集後記で山岳部現役部員が
いなくなることを心配していたのですが、
茶道部の部員で山に興味を持つ6人が山岳
部に登録してくれました。大学院生にも活
動に参加しようという有志が現れてくれま
した。この若者達が芯になって、1・2年
生の入部に繋がればと期待しています。

中村会員のご努力で日本山岳文化学会理
事の砂田定夫さんの力作『小谷部全助 文
献抄』の転載が本号で実現しました。大先
輩の偉業が今更ながらしのばれます。今号
は在米の加地さんからお母さんの山関係の
俳句の御紹介があり、有賀さん・金子さん
の山の歌関係の寄稿も頂いています。中村
会員のヒマラヤの東の新たな報告も入って
いますし、田形会員のアジア回遊の連載も
始まりました。会員による北岳バットレス
への挑戦計画、キリマンジャ口遠征計画も
伝わっています。会の伝統・山との色々な
対話等々、今度始まるホームページと連携

を取りながら現役学生達にも発信していき
たいと思います。(小島)

所沢の雑木林では今年もオオタカが営巢
してヒナが3羽生まれ、もうすぐ巣立ち
を迎えそうです。それを遠くから眺めなが
ら林の手入れ作業をしています。といって
も、緑が繁つてくると、伐木も炭焼きもお
休みで里山の仕事もヒマになってきます。
下草刈りをしなくちゃなりません、萌芽
更新した若木たちもたいぶ大きくなってい
るので、まあいいかということになりそう
です。で、夏は奥多摩の清流のワサビ田で
汗を流すことにしようかと思っています。

(井草)

ひさびさに女子部員が入ったことに伴
い、学生幹事を兼任することになりました。
まずは近場で楽しい山行を体験してもら
い、内なる関心に気づいてもらえたらと
思っております。微力ではありますが、今
後ともよろしくお願いいたします。(川名)